

平成24年1月1日

防衛大学校同窓会機関誌

Vol. 19

小原台だより



平成23年度 開校祭

同窓会ホームページ URL : <http://www.bodaidsk.com/>

C O N T E N T S

■平成24年新春を迎えて	3	■今人生、男盛り	
		生涯スポーツを楽しむ.....	18
■防衛大学校同窓会創立50周年によせて	4	ゼロからの挑戦.....	19
		出直して医師、そして今.....	20
■防衛大学校同窓会50年の歩み	6	定年後の活動.....	21
■副校長に聞く		■防大55期生に聞く	
防衛大学校創立60周年事業について	8	防大55期生に聞く	24
		潮気をつける.....	25
■新幹事に聞く		空幹候校の紹介.....	27
防衛大学校の原点に立ち返って.....	10		
		■支部だより	
■新訓練部長に聞く		「桜華会」活動状況報告.....	28
防衛大学校教育における「厳しさ」の追求.....	12		
		■連絡事項等	
■新防衛学教育学群長に聞く		平成23年度同窓会主催「講演会及び懇親会」のお知らせ ...	29
着任所感.....	13	機関誌「小原台だより」に関するアンケート調査 ...	29
		平成22年度防衛大学校同窓会決算書	30
■小原台は今		会費納入状況、会費納入のお願い.....	31
校友会活動(運動系・文化系).....	14	機関誌「小原台だより」投稿のお願い.....	32
		同窓会名簿管理に関するお知らせ.....	32
■同窓生アラカルト		期生会会長・代議員名簿.....	33
吉田茂の防大卒業生への願い.....	16	同窓会本部・支部等の役員紹介.....	34
		会員の計報.....	35

平成24年新春を迎えて

防衛大学校同窓会会長
齋藤 隆
(14期・海上)



激動の年が去り、また新たな年がやってきました。改めまして新年明けまして、おめでとうございます。同窓会会員の皆様も新たな年を平穩に迎えられているものと思います。昨年は防大同窓会創立50周年記念行事を3月に企画しましたが、大震災の直後でもあり取りやめることとなりました。皆様方には代議員会において直接ご挨拶もできずに失礼をしております。

顧みますと、第1期生が本校に入校以来、すでに59年の歳月が流れ、昭和36年に結成された同窓会も本年で51年を迎え、同窓生は、すでに2万3千名余りに及んでいます。ほぼ半数の同窓生は、既に国防の第一線を退いてはおりますが、国を思う志は、いささかも変わることなく、社会の様々な分野で活躍をしております。また現役の同窓生は、陸海空自衛隊あるいは各国軍の中核となっており、国内はもとより、広く世界各地において活躍をしております。特に昨年三月十一日に発生した東日本大震災において、陸海空自衛隊は初の本格的統合任務部隊を編成し、被災者の捜索・救助、瓦礫の撤去、被災者の生活支援そして原発災害対処を行ってまいりました。また米軍との共同作戦による救援活動も整備と実施し、国民の「最後の砦」として持てる力を最大限に発揮しました。陸海空自衛隊そして統合任務部隊が今回の未曾有の災害にその能力を遺憾なく発揮できたのも、小原台で同じ釜の飯を食った各級指揮官・幕僚の存在があったことは云うまでもありません。さて今回何人か被災された同窓生もおりましたが、大きな被災者がいなかったことは不幸中の幸いでもありました。

紙面に限りがありますが、同窓会の活動状況の一部を紹介させていただきたいと思っております。

春には防大2学年のカッター競技の応援に行ってきました。女性クルーの体力差を時間差に換算するなど、色々工夫をして競技を実施していました。表彰式には同窓会からのメダルを贈呈してきましたが、学生はメダルが同窓会から贈られているという認識も薄いようで、しっかりアピールしてきたところでもあります。

6月に毎年防大協力会が実施しています、留学生と横須賀市民とのバーベキューに参加させていただきました。現在語学研修中の留学生を含め80名近くの留学生が参加しました。その目の輝きをみて青雲の志を持った若者に圧倒される思いでもありました。

夏には千歳の第二航空団に3学年夏季訓練の激励に行きました。航空要員の部隊実習とはどのようなものか興

味が非常にありましたが、隊員一人一人の中に解けこんでなかなかいい実習をやっていると感じました。同窓会から学生個人にとっては微々たる金額ですが、気持ちとして3学年全員に夏季訓練激励金を渡しています。

夏から秋にかけて、同窓会のゴルフ、囲碁、テニス大会が実施されました。一桁クラスの大先輩の体力、気力、頭脳にただただ感服した次第でもあります。

11月には顕彰碑顕花式、開校記念祭に参列してきました。1期生から49の期生会代表者が今年新たに祀られた1柱に合わせて92柱の御霊への顕花、翌日はすばらしい秋空のもと展開された観閲式、棒倒しを堪能しました。棒倒しは人気が高く陸上競技場にあふれるような観客の中、若者の肉体がぶつかる様は圧巻でした。自衛隊を退官したOBとしていろいろな事を口で言うことはできませんが、今の私にやれといわれても不可能であります。まさに老兵は消え去るのみという一抹の寂しさを感じた一日でもありました。また卒業後20年を経た35期生のHVD (Home Visit Day) が開催され多くの家族も参加され盛大に実施されていました。

さて目を外に転じると、周辺安全保障環境は冷戦後最大の変革期に突入しつつあるように見えます。瀬戸際外交を継続する北朝鮮、急速に台頭する中国とどのように向き合っていくのか、そして復活しつつあるロシア。まさに国益をそこねずバランス感覚が要求される時代であります。また戦後の呪縛から脱しきれずにあえいでいる様は、黒船、終戦、そして三度目の開国を決断する時期に来ているような気もしてなりません。

このような厳しい国内外情勢を受け、国家の最後の砦として自衛隊の基本的責務は益々重要になってきていると思います。同時にその中核たる同窓生の果たすべき役割は益々増大し、まさに小原台教育の真価が問われていると言っても過言ではありません。

本年は開校60年を迎えます。この節目に同窓会として現在学校側と相談しつつ、横校長の肖像画等の寄贈を検討しているところでもあります。また、このような時だからこそ各種母校支援も可能な限り充実したいとも思っています。

今ここに改めて、一層の同窓会の充実と発展に尽力することを会員の皆様にお誓い申し上げますとともに、世界各地で戦災、災害に遭われた皆様の安寧を祈念しつつ、今年こそ平穩な一年であることを切に祈って新年のご挨拶とさせていただきます。

防衛大学校同窓会創立50周年によせて

防衛大学校学校長
五百旗頭 真



防大生の士官学校交流をグローバルに拡大することが、学校長としての私にとって課題の一つである。視野の広い、世界に通用する防大生であり、幹部自衛官でなければならない。着任した翌2007年秋、横先生の『米英士官学校歴訪の旅』を手にも、私は米国の三士官学校を歴訪しようとした。アナポリスの海軍士官学校とコロラドスプリングスの空軍士官学校では、温かい歓迎を受けた。スタートしようとしていた1セメスター交流（1学期・4ヵ月間、2名を相互に派遣し合う留学制度）を固めることができた。第2次大戦後、防大創設と同じ頃に新たに発足した空軍士官学校とは、とりわけ心の通じ合うものを感じた。

ところが、陸のウエストポイントからは訪問を拒否された。何度か打診したが、校長不在とか、行事が立て込んでいるとかの理由で、その都度断られた。日米同盟を何と心得ているのか。翌2008年秋、ワシントンでの国際会議のために防米した際、強引にウエストポイントを訪ねた。この度も校長不在で応接できないとおっしゃる

のを、それでもかまわないと、太田文雄教授とともに押しかけたのである。

ウエストポイントでは、日本語を教えていないので、持続的に防大と交流するのは難しいと教務担当がおっしゃる。ウエストポイントとしては日本語も教えたいが、陸軍省の決定だから仕方がないと。昼食時に日本語を多少ともしゃべることのできる学生を集めてもらって懇談したところ、抜群に流暢な2年生がいた。聞けば母親は日本人だという。正規に教えていなくとも、日本語のできる学生がいるではないか。仮に1名ずつ派遣し合うことから始めようと合意をした。今では、アメリカの陸海空各士官学校2名の1セメスター交流と、それぞれの国際情勢会議へ2名派遣。加えて南部のヴァージニア軍学校（VMI）との1セメスター交流が制度化されている。火箱陸幕長をはじめとするお力添えがあり、新しいウエストポイントの校長ハントゥーン中将を2011年に防大に迎えることができたのは感慨深い。

2009年10月には、ヨーロッパにポーランドと独仏英を訪ねた。フランスの3士官学校との1セメスター交流、ドイツに3か月の語学研修と1か月の交流に2名派遣することなどが実現している。2010年度は南米にブラジル、チリ両国、そして韓国の諸士官学校を訪ねた。国際会議に招かれた折などに、中国やインド、ロシアの士官学校を訪ね、交流の扉を開ける努力を続けている。太田教授の現地調整に基づき、アラブ語研修と交流のためのカタール派遣（2名）も始まった。

若い日に実地体験を持ち、人的ネットワークを作ることは貴重である。それを支えるのは言うまでもなく人格であるが、語学と知識という手立てが不可欠である。このところ、防大では学生の英語力強化に力を入れ、第2外国語を奨励している。言葉に劣らず内容が大事である。防大では国際関係に加えて、世界各地の地域研究の教授陣を



表敬を受ける学校長（第3回理事会：23.10.6）

充実し、理工系を含む全学生に地域研究を少なくとも一つ履修させている。将来思いがけない異文化の地にPKO派遣されることを期さねばならない防大生の知的準備の一つである。

防大の国際交流にも重い伝統がある。そのことを去る2011年9月の東南アジア5ヶ国訪問の際に改めて感じた。アジア諸国を中心に防大へ留学しているcadetsは80名、研究科学生を含めると100名に及ぶ。この度は派遣している士官学校とその国への挨拶の旅であった。最大の派

遣国はタイであり、防大卒業生の累計はほぼ200名という。バンコクの日本大使館に約70名が妻子を伴って集まった。大変な熱気であり、防大6期生の最年長留学生は、挨拶の中で防大への想いを語るうち涙で絶句した。留学生にとっても小原台は魂のふるさとなのだ。先輩たちの築いた伝統の偉大さを、異国の地で改めて感得した次第である。

同窓会の皆さまにありがとうございます。そしてこれからも、21世紀を航海する防大生たちをよろしく願い申し上げます。



本館と富士山



記念講堂と中央広場



防衛大学校同窓会50年の歩み

年度	同窓会			防衛大学校	西暦
	主要事業・施策	会 長	その他		
昭和 25					1950
26					1951
27				保安大学校設置	1952
28				保安大学校開校(久里浜)・初代 横 智雄 学校長	1953
29				防衛大学校に改名	1954
30				小原台に移転	1955
31					1956
32				#1期卒業	1957
33					1958
34					1959
35					1960
① 36	同窓会設立(事務局・防大)	陸1 志摩 篤			1961
⑤ 37	第一号「会報」発刊	海1 後藤 理		#10期入校	1962
38		陸1 小谷 章			1963
39		陸1 長尾 司			1964
40		空1 平山 救馬	横学校長胸像案策定	横学校長退官	1965
41				第2代 大森寛学校長	1966
42		海1 日高 和重			1967
43					1968
44					1969
②③ 45	横学校長胸像・横文庫寄贈	陸1 松本 信義		第3代 猪木正道学校長	1970
46					1971
47				#20期入校	1972
48		海1 高山 雅司			1973
49					1974
50		空1 高橋 恆清			1975
51					1976
52		陸1 伊左次 達			1977
53				第4代 土田國保学校長	1978
54		海1 吉川 圭祐			1979
55					1980
56		空1 田村 秀昭			1981
④ 57	顕彰碑建立(59柱)			#30期入校	1982

1 防大同窓会設立の経緯

- (1) S33秋頃：卒業生及び学校本部から同窓会設立の要望により検討着手
- (2) S34. 1：第1次会則案をもって研究会開催（竹下幹事を中心とする学校本部、校友会、#3～5期生会代表等による）
- (3) S34. 2：第1回設立のための打合せ会開催。同窓会の必要性を確認するとともに校友会、期生会との関係整理。（横学校長含む3役、訓練部長、図書館長、学生課長等学校関係者。内局教育課部員。卒業生#1、2期約30名。総勢約60名で会合）
- (4) S34.12：卒業生による設立準備委員会開催
- (5) S35. 4：卒業生アンケートの結果（賛成回答）を受け仮発足。学生課校友会係を窓口として同窓会事務局（仮称）設置
- (6) S35. 8：#1期生5名が初めて指導教官として防大着任。以降会則審議等準備
- (7) S36. 1.21：設立総会（会長陸1期志摩2尉選出）

2 横学校長胸像寄贈について

- (1) S40. 2：横校長離任送別会における同窓会臨時総会において記念像設立案可決
- (2) S43.11：胸像設立実行委員会設置
- (3) S44.11：横学校長胸像原型完成 後藤光行氏（東京美術学校彫刻科、同研究科卒）
- (4) S45. 5：胸像除幕式（1大隊学生舎前）

3 横記念文庫開設

胸像寄贈とともに横先生顕彰事業の一環として、横学校長退官に際し同窓会に寄贈いただいた約2000冊の図書を同窓会からあらためて防大側に寄贈したことにより、図書館の一室に開設されたものである

4 殉職同窓生顕彰碑について

- (1) 防大創立30周年記念に合わせた同窓会事業の一つとして、長年の懸案であった顕彰碑を建立、寄贈したもの
- (2) 当時東北方総監（防大元幹事）の林栄一郎陸将から寄贈あった碑石（宮城県丸森町産の白御影石（25t））に、防大創立時の防衛庁長官木村篤太郎先生揮毫による
- (3) 昭和57.11.14日除幕式（59柱の殉職者名簿奉納）

年度	同窓会			防衛大学校	西暦
	主要事業・施策	会 長	その他		
58		陸1 源川 幸夫			1983
⑤ 59	「ゆうかり」発刊		財団法人設立委員会設置		1984
60					1985
61		海1 佐久間 一			1986
62				第5代 夏目晴雄学校長	1987
⑥ 63	同窓会東京分室(六本木)設置				1988
平成 元		空1 松村 嘉夫			1989
2	財団法人設立準備室(分室内)設置				1990
3					1991
4		陸1 中尾 時久	16代(初代退官OB会長)	#40期入校	1992
⑦ 5	財団法人化断念			第6代 松本三郎学校長	1993
⑤ 6	「小原台だより」発刊				1994
7	将来構想検討委員会発足				1995
8	将来構想策定	海1 小西 岑生			1996
⑥ 9	事務局移転(六本木を経て市ヶ谷)		ゴルフ大会開始		1997
10			テニス大会開始		1998
11			ホームカミングデー開始(1期)		1999
12		空1 阿部 博男	囲碁大会開始	第7代 西原正学校長	2000
13					2001
⑧ 14	防大50周年記念支援事業		作品「若人の城・国の護り」寄贈	開校50周年記念・#50期入校	2002
15		陸6 渡邊 信利	同窓会あり方委員会設置		2003
16					2004
17	顕彰室(資料館内)開設	海7 佐伯 聖二	同窓会在り方答申		2005
18			ホームビジットデー開始(30期)	防大卒業留学生交流事業開始	2006
19		空9 竹河内捷次	同窓会女性支部(桜華会)発足	第8代 五百旗頭眞学校長	2007
20			横記念室整備支援	「横記念室」開設	2008
21		陸12 先崎 一			2009
22	50周年記念行事		同窓会旗、表象制定		2010
23		海14 斎藤 隆			2011
24				開校60周年記念・#60期入校	2012
25					2013

注：左欄丸数字番号は補足説明に対応

*本資料作成にあたっては、明示のない限り同窓会機関誌及び同窓会事務局員であった#16田代氏とりまとめ資料ならびに創設時における同窓会設立準備会議議事録等を参考に実行委員会が作成したものである。

5 同窓会誌の名称変遷

- (1) 昭和37年～同57年：「会報」(創刊号～19号)
- (2) 昭和58年～平成5年：「ゆうかり」(1号～9号)(防大創立30周年記念事業に合わせ、同窓会活性化事業の一環として会報の充実を図るべく改称)
- (3) 平成6年～：「小原台だより」(同窓会の将来構想検討委員会の設置に合わせて機関紙の充実を図るべく改称)

6 同窓会事務局の変遷

- (1) 昭和36年～平成9年3月：防大側の理解、協力を得て学校本館学生課内に設置
- (2) 昭和63年：連絡調整の便益ならびに財団法人化準備委員会の設立に併せて、東京六本木(部外借り上げ)に東京分室を設置
- (3) 平成9年4月～6月：改めて東京分室に同窓会本部事務局を設置、防大事務局は小原台事務局として改称
- (4) 平成9年7月～：防衛省移転に先立ち後の利便性を考慮の上、事務局を六本木から市ヶ谷に移転(現共済ビル3F)

7 財団法人化案に関する経緯(小原台だよりVol.1「財団法人設立断念について」より抜粋)

- (1) 昭和55年頃より同窓会館設立の機運が盛り上がり、そのために同58年に財団法人設立委員会が設置された
- (2) 財団法人化のためには公益性が必要条件であり、このため防衛人材確保協会(仮称)として法人化を目指すべく検討が続けられた
- (3) 平成3年頃から内局と本格折衝を始め、一時は内局構想による防衛交流協会との合体案も提示されたが、本来の趣旨に合致せず、また財団法人化のための収益事業の具体化の見通しが立たず平成5年6月の臨時評議委員会にて断念するとの議決がなされた

8 防大50周年記念支援事業について

- (1) 平成8年から防大の事業と連携して検討が開始された。支援事業の基金として同窓生から募金を開始。最終的に浄財1億2千万円強の支援事業となった。
- (2) 主要事業は、学校中心地区の施設整備に合わせたモニュメント(記念講堂に多摩美大教授 平松礼二画伯原画「若人の城」のステンドグラス及び中央広場に愛知県立芸術大学教授 高橋洋先生彫刻像「国の護り」)寄贈、記念講演(三浦朱門先生「望ましき自衛官像」、公募した記念マーチ等8曲の贈呈をはじめとし、その他学校要望による顕彰室・資料館の整備支援や各種記念品(ビデオ「任重く道遠し」、ブックレット「防衛大学校50年のあゆみ」)の作成であった。

防衛大学校創立60周年事業について

防衛大学校副校長（企画・管理担当）
防衛事務官 高嶋 巖



初めに、全国各地において御活躍の同窓会の皆様に敬意を表するとともに、本校に対する御理解はもちろん、平素から校内競技会や学生の部隊実習などにおける各種の御支援に深く感謝を申し上げます。学生は競技会で同窓会から授与される個人メダルなどを非常な励みとしております。

私は、7年程前に総務部長として本校に約1年勤務し、平成21年8月から企画・管理担当副校長として再び防大に戻ってまいりました。現在、副校長として3年目に入りましたが、将来の自衛隊の幹部を養成するという任務の重要性に緊張しつつも、その任務に携われる喜びをかみしめながら毎日を送っております。

さて、防衛大学校は今年で創立60周年を迎え、さまざまな記念事業を予定しておりますが、忘れてならないのは、同窓会には平成14年の創立50周年の記念事業に際しても大変お世話になっていることです。特に、当時寄贈され記念講堂入口に飾られているステンドグラス「若人の城」（平松礼二氏作）と中央広場にある彫刻像「国の護り」（高橋洋氏作）は、まさに防大生を具現化したものであり、防大生や防大を訪れる者に強い印象を与えています。さらに同時期に寄贈された50周年記念行進曲「飛翔」（神明作曲）などはパレードや定期演奏会で演奏され、好評を博しています。このような著名な芸術家による作品は、性格上国費で支弁することが困難であり、予算を担当する副校長としても、大変ありがたく思っております。

本年度に実施する「防衛大学校創立60周年記念事業」については、数年前から同窓会と調整を行うなどの事前準備を進めておりましたが、防大内に昨年二月、私を委員長とする準備委員会を正式に立ち上げました。

具体的な事業としては、防衛大学校創立60周年記念式典を、平成24年度の開校記念祭（11月中旬）に合わせて実施することとしております。平成14年の創立50周年記念式典には小泉総理（当時）をお招きしましたが、これは小泉総理が地元横須賀出身でもあったままたま実現したものでした。今回は防衛大臣を招いての式典・記念植樹、観閲式、特別講師による記念講演などを計画しております。また、観閲式においてはブルーインパルスの祝賀飛行をぜひ実現させたいと考えております。細部が決まり次第、内容を同窓会にお知らせするとともに、直

前には防大ホームページにも掲載する予定です。

さらに、平成14年の創立50周年記念事業では「防衛大学校五十年史」を刊行しましたが、今回は、その後の10年間の資料の編さんを行うとともに学校長講話集の発刊も予定しております。

そして防衛大学校創立60周年記念事業の最大の柱は、「建学の碑」エリアの整備です。現在、細部について訓練部長を中心に検討が進められております。検討は、同窓会と調整しつつ、また、横初代学校長のご遺族のご意向も確認しながら行っていますが、現状は次のとおりです。

「建学の碑」の場所については、本年2月に完成する新しい第一学生舎の角地（従来横初代学校長の胸像があった場所）を予定しております。整備内容ですが、現在、資料館の横記念室にある横学校長胸像と、プール脇にある学生歌碑（3期生寄贈）および学生綱領碑（9期生寄贈）を御影石を敷詰めた同地区に移設し、周辺には横学校長ゆかりの楓を植樹しようとするものです。また、周辺にさらに植樹スペースを確保できないか検討しています。

また、横学校長胸像の台座を従来よりも大型化して、そこに横学校長の「忘れ得ぬ言葉」を刻もうともしております。お言葉の内容ですが、数ある中から何が一番ふさわしいのか、現在悩んでいるところです。

このようにして整備した「建学の碑」は、卒業生にとっては、小原台に試練と挑戦の若き日を過ごした者が、生涯にわたり魂のふるさとと感じる防大を再訪した際、ここで想を得て新たな出航にたち向かうにあたり、まず立ち寄るべき場所であり、防大生にとっては、将来の国防を自ら担おうと志した若者が、諸先輩が魂のふるさとと感じる防大において防大生としての誇りを新たにすることにあたり、立ち寄るべき場所となることでしょう。

母校を久方ぶりに再訪された卒業生に対して、「建学の碑」が整備された暁には、既存の資料館などと合わせて、次のような順路で校内をご案内できることとなります。

まず、「建学の碑」に立ち寄り、学生歌に思いをいたし、学生綱領をなぞって精神の拠点に立ち返っていただく。次に、資料館の横記念室にて、横学校長による教育理念を振り返るとともに防大の歩みをたどっていただく。そして、記念講堂脇の「顕彰の碑」において、殉職した同窓生の遺徳をたたえ、鎮魂する。それから学生舎などで

現在の防大生を確認し、教育訓練、学生舎生活、校友会活動に励む後輩達を激励などしていただければと思っています。

同窓会からは、60周年記念事業整備に際して次のような寄贈品をいただけると伺っております。まず、横学校長の胸像を設置するための大型台座、これには前に述べたように横学校長の「忘れ得ぬ言葉」を刻む予定にしています。さらに、資料館内にある横学校長の胸像を移設させることに伴い、胸像に替わるものとしての肖像画、そして、資料館に飾る歴代学校長のレリーフです。これらは予算の関係もあって、学校として整備しにくいものであり、大変ありがたく改めて感謝申し上げます。

昨年9月13日には肖像画などの具体的設置場所、大きさのイメージをつかむために、齋藤同窓会長、林副会長、直海事務局長らが来校し、現場を視察されました。どのようなものになるのか、学生、職員一同楽しみにしております。

卒業生の皆様が防大を訪れる機会としては、どのようなものがあるでしょうか。まずホーム・カミング・デーです。これは平成12年に当時の松本学校長の発案で卒業43年目にあたる卒業生を卒業式に招待したことからはまりました。本年3月の卒業式には13期生をお招きできることをうれしく思っております。65歳という人生の節目に母校に戻り、若い後輩の門出を祝福し、合わせてご家族を含めた同期の絆を高めていただく一助にいただければ幸いです。毎年できるだけ席を確保するよう努めておりますが、一部会場に隣接するAVホールでの観覧となるなど至らぬ点が多々あることを心苦しく思っております。

また、平成18年からは開校記念祭にホーム・ビジット・デーとして、卒業20年目にあたる卒業生においていただいております。自衛官としての経験を十分に積んだ現役同窓生として学生に刺激を与えていただくとともに、ご家族を含めた同期の団結を深めていただければと思います。昨年11月の開校記念祭においては稲月秀正一佐以下35期生が、ご家族を含め総勢約200名で来校されました。

これらの他、各期生会が随時計画をされて防大を訪問されています。例えば、昨年9月30日には8期電子工学科航空5班の有志が、また10月12日には5期生がご家族とともに総勢240名で卒業50周年を記念して来校されています。このような来校に際しても、できる限りの便宜を図りますので、何なりとお知らせください。

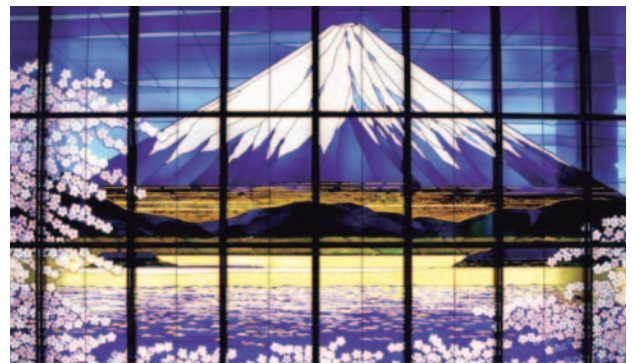
さらに個人での母校訪問も歓迎いたします。週2回一般の方を対象とした防大ツアーを開催しており、これに参加されても結構ですし、防大ツアーとは別に個人やご家族だけで訪問を希望される場合にも事前にご連絡いただければ対応いたします。急に思い立っての来校につい

ても、平日には総務課職員が、また、休日には当直幹部が対応するようにいたします。ただ、以前と違って、警備の都合上、防大生や職員以外が自由に敷地に入れなくなっておりますので、正門にて卒業生であり見学を希望する旨お伝えくださればと思います。

防大の施設も50周年以降変貌しております。陸上競技場の全天候化は完了し、今はラグビー場の人工芝化を進めております。学生舎は本年2月で4大隊分すべてが新しくなります。新食堂も来年完成予定です。さらに懸案の理工学館の建替えも来年度から12年計画で開始されます。

卒業生の皆様におかれては、ぜひ機会をとらえて防大に足をお運びいただき、改めて心の故郷小原台を再確認し、若き日に思いをいたすと同時に、学生や教職員を激励していただければと思います。

平成24年度は、創立60周年とともに、昨年6月に報告された防大改革における検討結果を推進する重要かつ出発の年とも言えます。改めて、創立60周年の節目にあたり、教職員一体となり、本校の益々の発展を目指してまいります。また、来校された際にご家族に自慢できるような防大でありたいと思っております。同窓会の皆様におかれましても、なお一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。



若人の城



国の護り



資料館

防衛大学校の原点に立ち返って

防衛大学校幹事

陸将 田中 敏明 (23期・陸上)



はじめに

防大に着任して間もない時期に、外国軍人から防大の校章の由来について尋ねられ、応答に窮し恥ずかしい思いをした。校章や部隊章には、学校や部隊の創設に至る歴史や創設に関わった人たちの思い等が込められており、米軍の学校や部隊を訪問すると、その冒頭で校章や部隊章の説明を受けることが多い。防大での勤務は卒業以来32年振りであるが、忘れてしまったというより、学生当時は与えられるものをただ受け入れるのみで、それらが何を意味しているのか、どのような経緯を辿って現在に至っているのか等と疑問を抱き、考えている余裕はなかったように思う。このように、防大に学生として4年間在籍したとは言え、防大に再び勤務して、防大のことをあまり知らなかったことに気付かされた。

防衛大学校は本年、創設60周年を迎える。人間で言えば、十干十二支が一巡して、来年は還暦となり、わが国では赤いちゃんちゃんこを着て祝う習慣がある。これは、生まれた時に帰るという意味だそう。また本年は、昨年6月1日に大臣報告された「防衛大学校改革に関する報告書」に基づき、改革に本格的に着手する年でもある。「故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る」と言う。このような節目に当たり、今は防大において当たり前に思われ又は行われていることが、どのような考えの下に生まれ、どのような経緯を辿って現在に引き継がれてきているのか、防大の原点を探ってみることにする。

校章・校旗に込められた思いとは？

冒頭に申し上げた校章の由来については、残念ながら文書として書き残されたものはない。ある資料によれば、校章の図柄には2説あり、1つは、日本の国花である「桜」と平和のシンボル「鳩」、そしてこれらを守る若人を象徴する桜の「若葉」という説で、もう1つは、「桜」が陸上、「若葉」（いかり）が海上、「鳩」が航空を表しているという説である。本稿でどちらの説が正しいかを論じるつもりはないが、私は、日本の平和を守るため集いし若人、つまり防大生そのものを表したものと考えたい。一方、校旗の制定経緯は、防衛大学校五十年史に明確に記載されている。校旗は承知の通り、ディープ・ブルーの地に金色に輝く校章を浮かび上がらせたものであるが、その図案は学生から募集して、最終的には専門家の意見を参考に榎学校長自らが決定し、昭和30年9月に制定された。校旗のディープ・ブルーは、明朗、誠実、清純、正義を象徴しているとされ、防大生に求められる資質を校旗の色に込めたものと理解できる。このようなことから、

防衛大学校の校旗は、防大生が本校の教育を経て、士官候補者に相応しい資質を涵養して、将来幹部として光輝く存在に成長して欲しいという、初代学校長の思いが込められたものであり、防衛大学校創設の理念を形にしたものであるとも言える。

学生自ら起草した学生綱領

学生綱領起草の動きは、昭和38年5月に、4学年の一部有志による会合が持たれたことに始まった。榎学校長はかねてより、列国士官学校が有している名誉綱領（オナー・コード）に相当するものを作るよう、学生に働きかけていたと言われている。学生の綱領起草の動きも、このような学校長の考えを受けてのものと思われる。またこの時期は、防衛庁に自衛隊教育調査会が設置され、自衛隊内の全教育機関の教育体系が検討されるとともに、防大においても、創設10周年の節目に合わせて、防大教育の改善策などが鋭意検討されていた。昭和38年9月、長官報告された自衛隊教育調査会の防大に関する報告の中で、「補導及び学生指導については、規律、しつけ等をさらに強化するために、学生綱領（仮称）を作成」するべきであるという指摘があり、学生の自発的な動きとして始まった学生綱領起草の動きは、これで加速された。このようにして始められた綱領の起草は、8期生による中間とりまとめを経て、9期生と10期生に引き継がれ、昭和39年12月に、誠実を基調とし「廉恥、真勇、礼節」をモットーとする学生綱領が完成した。榎学校長は、「開校以来学生の間におのずから誕生するのを久しく待っていた」、「社会に理想がなければ退廃する。名誉を思い互いに戒めみずから規制」することが「綱領実践の心髄である」と述べ、学生綱領の起草に直接関わった8期生、9期生の努力を称えとともに、学生綱領の学生による実践を促した。学生綱領はまさに、自主自律を重んじた初代榎学校長の10年間にわたる本校での教育の成果であり、防大の精神的規範の目標として現在に引き継がれている。

伝統の校内競技会の経緯

防大時代を振り返って、勝利を目指して若き血を燃やした伝統の競技会を思い起こされる同窓会の方は多いと思う。本稿を書いている現在（10月下旬）、防大生は、来る開校記念祭における棒倒しでの勝利を目指して、各大隊とも朝・夕の時間を活用して猛練習に励んでいる。防大は開校以来、防大生としてふさわしい体力と気力等の精神要素の育成に資するため、体育活動を重視してきた。今では伝統行事となっている各競技会は、その具体的な方策の一環として、校友会運動部等と共に開校当初

から実施されてきた。ただし、各競技会は、校友会運動部や体育教育等との関係でそのあり方が検討され、様々な経緯を辿ってきたことから、同窓生の中でも在校した時期により認識が異なろうかと思うので、ここで簡単にその経緯を紹介したい。まずカッター競技会は、実は2学年海上要員のシーマンシップの涵養及び気力・体力の練成を目的に、昭和29年1月に始まった。翌年からは全学年が対象となり、現在と同じように2学年を対象として春に行われるようになったのは昭和33年からである。また、平成4年から入校するようになった女子学生については、平成8年から女子艇として、平成16年からは女子も男子に混じってカッター競技会に参加するようになった。2学年生は、このカッター競技会の試練を乗り越えて、防大生としての自覚と自信を持つことになる。次に断郊競技会は、昭和29年12月に、全学生が木銃を携行して走るクロスカントリー（武装競走）として始まった。その後、全学生が参加する断郊形式となり、昭和33年からは現在と同様、3学年のみが対象になった。昭和42年からは再び全学年が対象になり、昭和46年、4学年の卒業研究への影響を考慮して1学年から3学年に対象が絞られた後、47年からは、3学年だけが対象になり現在に至っている。断郊競技会は、3学年同士の切磋琢磨により、自らが自らを鍛えて競い合うもので、今では4学年への登竜門の一つになっている。水泳大会は、昭和29年9月に武山にあった米海兵隊プールで、全学生が参加し中隊対抗で行われたのが始まりで、その後間もなく、現在と同様の大隊対抗になって現在に至っている。最後に、開校祭の名物ともなっている棒倒しは、昭和28年11月に、横須賀市立工業高等学校のグラウンドで行われた第1回校内運動会の一競技として始められた。久里浜の仮校舎から小原台の本校舎に移った昭和30年からは、運動会の時期に開校祭が実施されるようになり、それ以降は、現在と同様、開校記念祭の中の運動会（体育祭）のメインイベントとして行われるようになった。以上の伝統の4大競技会は、今でも学生が最も燃える行事であり、校友会運動部の活動と相まって、創設当初に体育活動に期待された気力・体力等の育成に寄与している。そして更に、それぞれの競技会は、その準備や実施を通じて、学生の自主積極性とリーダーシップの発揮にも役立っている。

学生舎生活の変遷

学生舎生活については、創設時を除き、私が学生だった昭和53年度までは、大隊は5個大隊制で、部屋編成は8人であった。そして、当時建設が進められていた6・7・8号学生舎の完成に伴い、大隊制については、昭和54年度に5個大隊制から4個大隊制に移行している。それにとともに、5大隊の大隊旗はどうなったのかと思われる同窓生の方に、その時のエピソードを紹介する。当時5大隊と1大隊の大隊旗に使用されていたシンボルは、それぞれ、「赤い虎」と「紫の龍」であった。4個大隊制への移行にあたって、5大隊の学生が1大隊に移ったことから、5大隊のシンボルの赤と1大隊のシンボルの龍

を組み合わせ、「赤い龍」が新たな1大隊のシンボルになったと言われている。ここに、5大隊の伝統を引き継ごうとする工夫が見られた。次に、部屋編成の変遷について紹介する。部屋員の人数は、久里浜時代の大部屋を除き、昭和53年度までは8人で、54年度からは4人、63年度から平成9年度まで移行期を含めて2人、平成10年度からは再び4人となった。同じ8人部屋、4人部屋と言っても、内容的には学年混合であったり、同一学年だけであったりと様々であり、どの時期に在学したかによって、同窓生の中でも認識の異なるところである。このような状況の中で、平成12年3月末、既存隊舎の老朽化に伴い新学生舎の整備を検討するため学生舎整備委員会が設置された。この際、リーダーシップの涵養、社会性の獲得、監督・指導の強化、相互牽制作用による勉強意欲の向上、学生舎の雰囲気特に第1学年の生活環境の改善等の観点から、部屋編成についても検討がなされた。その結果、平成15年2月に実施された第8回学生舎整備委員会において、新学生舎の部屋編成は8人部屋とすることが了承され、平成16年から逐次8人部屋に移行している。現在、第1号隊舎の建て替えが行われており、本年度末に完了する予定で、部屋編成は、防大創設60周年を迎えて、完全に8人制に移行することになる。この8人部屋編成は、1学年から4学年までの縦の関係と同学年2名という最小限の横の関係を律することができ、しかも陸・海・空の要員が混在するという、防大創設の理念にも合致した編成で、世界的にも例を見ない防大の一大特徴であり、伝統でもあった。このような観点から見ると、33年振りとなる8人部屋への完全復帰は、時代の風潮に流された一時期を反省し、防大創設時の原点に立ち返った結果であるとも言える。8人部屋体制が正しく機能して、他の補導施策と相まって学生舎生活が本来の狙い通り、幹部自衛官に必要な資質涵養の場となるよう指導していきたい。

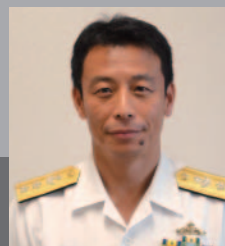
おわりに

防大は、60年の歴史の中で大きな変革を遂げ現在に至っている。教育分野における変革は顕著で、例えば創設時4個であった学科は現在、文系の3個学科を含めて14個学科になっている。また、自衛隊の任務の多様化・国際化に対応して、語学教育の充実や地域研究の必修化等の改善が図られている。今回改めて、このような防大が変化している点ではなく、防大の伝統として受け継がれてきた面に着目して紹介したのは、私への自戒とともに、防大が創設されて20年有余を過ぎた時期に入校した私がそうであったように、伝統と言われるものが形だけ継承され、それが何を意味しているのかという根本のところは失われ風化してしまうことへの危機感を感じたからである。防大が60年という歴史の1サイクルを終えて再出発するに当たり、今一度防衛大学校創設の原点に立ち返って諸施策を点検・評価して、次のサイクルにおいても防大がその役割を果たし続けるために何をなすべきかを考え、防大改革などに全力で取り組み、世界に通用する後輩を育成していきたい。

防衛大学学校教育における「厳しさ」の追求

防衛大学校訓練部長

海将補 山下 万喜 (27期・海上)



平成23年8月5日に訓練部長を拝命しました。昭和54年4月に防衛大学校27期の学生として入校した時から数えて32年、卒業から28年振りの小原台にて勤務する機会を得て、本校の教育がいかに素晴らしい環境で行われているか、恥ずかしながら再認識することが多々あります。巷の雑事から隔離された学生舎での衣食住は事足りており、アルバイトなどに時間を縛られることなく、金銭的にも特段の不自由もありません。持ちえる時間は自ら選んだ勉学や課外活動に費やすことができ、就職活動などの煩わしさからも解放され、前途洋々たる将来が保障されています。自らの卒業から四半世紀を経た今、教育者としての視線をもってこの学校を見つめ直すと、何不自由なく恵まれた環境にて学ぶことができる現実を素直に実感することができます。この実感が32年前の自分にあったかと言えばその答えは否であり、私を含む多くの学生が俗にいう自由な生活への憧れの中で、不満と共に過ごしたように記憶しています。もちろん、ここで学ぶ4年間で不満なく過ごす学生の存在を否定することはできません。ただし、本校の教育が教場のみならず、学生舎生活にまで及ぶことから、生活の殆どがいわゆる形から入る修養の場でもあり、不自由な生活の中に「厳しさ」を感じることは当然だとも考えられます。むしろ、このように教育者と学生との間に感覚のギャップが生じていることの方が自然であり、これを克服するところに将来の幹部自衛官を育てる本校の特徴があるようにも思えます。

単に一般的な勉学に勤しむだけなら防衛大学校で教育する必要がないことは言うまでもなく、これに加え訓練を課し学生舎における普段の生活にも「厳しさ」を求めていることに本校の存在意義があり、知徳体の一貫した教育が可能となるものと考えます。学生一人一人の個性を尊重しながら、防衛大学校教育の特徴である「厳しさ」を追求することができれば、学生は人間的に大きく成長することができます。ただし、個性の尊重と形から入る「厳しさ」の追求には相反するところがあり、これを両立させることは一見困難なようでもあります。個性に反する「厳しさ」を押しつけければ学生は反発するだけであり、4年間の「厳しさ」をただ単に耐え抜いただけであれば、人間的な成長はさほど期待できないと思われます。多種多様な価値観と個人の考え方が尊重される時代の学生に対し、これらを両立させることが訓練部に課せられた重要な使命でもあります。このため、学生に対して形

から入る「厳しさ」の持つ意味を十分説明し、納得できるよう意を尽くし指導することは両立のための第一歩であり、学生間での指導を含め訓練部内の教育態勢を強化しています。しかし、全ての「厳しさ」について、学生の抱く全ての疑問に納得できるよう説明するにも限界があります。そこで必要なことは、学生が自ら「厳しさ」に挑みその意味を見出すことができるよう考えさせる教育です。そのためには、「厳しさ」に立ち向かう気構えとして、「やらされている」と言う気持ちを捨て、自らの成長の機会と捉える「やらんかな」の気概を醸成させる工夫が必要だと考えます。学生に「やらんかな」の姿勢を持たせることができれば、学生は形から入る「厳しさ」の持つ意味を自ら考え、防衛大学校の恵まれた教育環境に気付き、教育者との間にある感覚のギャップを克服することも期待できます。

訓練部長として着任した際に、学生に対し自分の可能性を信じ「キラキラ輝け」ということを要望しました。学生にとって教務、訓練、学生舎生活、校友会活動などここ小原台で学ぶ機会は様々です。各学生は幹部自衛官になるという目的に向って自らの内にある輝きを見つけ出し、常にその輝きに磨きをかけることを忘れないでもらいたいと思っています。防衛大学校での教育を通じ、「やらされている」という気持ちではなく、教育を受ける機会が与えられているのだという感謝の気持ちとともに、「やらんかな」の気概を持たせることができれば、目前の「厳しさ」を乗り越え、学生期間中の不自由さをも楽しむことができるようになるのではと期待しています。本校が素晴らしい教育環境を備えた学校だという教育者の感覚と、「厳しさ」を押し付けられる学生の感覚とのギャップの克服は、将来的に自衛官として勤務するにあたり、日頃の訓練や業務における「厳しさ」の追及にも通じるところがあります。目前の「厳しさ」を押し付けられるものではなく、自己成長の機会だと捉えることができるか否かが教育の質を左右するのと同じように、部隊の練度や仕事の質に顕著に表れます。学生の持つ可能性を引き出しつつ「厳しさ」を追及する教育は、「厳しさ」の中身の教育であるとともに、「厳しさ」に望む姿勢の教育でもあります。このことを、防衛大学校での教育における欠くことのできない重要な課題だと認識し、今後とも本校教育の質を高めるよう訓練部一同取り組んでまいります。

着任所感

防衛学教育学群長 防大同窓会小原台事務局長
空将補 武藤 茂樹（28期・航空）



1 はじめに

新防衛学教育学群長の武藤です。1984年に28期生として卒業して以来、27年ぶりに母校で勤務することになりました。宜しくお願ひいたします。

本配置への異動調整があった時には、昨年から空将補が補職された新しい配置であることと私自身の経歴上、教官経験がないことから、教授としての学生教育に少々不安を感じていましたが、本稿が小原台に掲載されるころは、着任して半年が過ぎて教育業務も落ち着いていることと思います。学生時代を振り返って見ると、防衛学の教官たちはその道のプロで、頼りがいのある先輩であったように記憶しています。そのような観点から、着任にあたり、先輩として部隊勤務を通じて身に付けてきたものを、学生教育を通じて伝えて行きたいと考えています。

2 空将補の学群長

昨年より防衛学教育学群長に空将補を補職していることは、私の前任者である尾上空将補が小原台への寄稿ですでに紹介していますが、1年あまりの出来たての補職であり、認知度があまり高くないことから、この場をお借りしてあらためて紹介したいと思います。

防衛学教育学群長は、学校長の命を受け群務を掌理するという職務を主体に、兼ねて防衛大学校教授を命ぜられ、統率・戦史教育室に所属し、3学年の「統率」及び4学年の「防衛学特論」の教務を行っています。恒常業務、各種会議に加え、学生教育に関わる実務がかなりの仕事量ですが、この他に、同窓会小原台事務局長、日本防衛学会理事（研究発表大会実行委員）、グライダー部部长などの配置指定職務、更には国際防衛学セミナー、環太平洋士官学校長会議の実行委員という重要な職務を担っており、空将補を補職するに相応しい要職です。

防大改革を推進しつつある重要な時期にこのような重責を拝命しましたが、前任者の功績や実績を踏まえて、着実に前進できるよう業務に専念したいと思います。また、小原台は2万人を超える同窓生の心の拠り所であると考えておりますので、同窓会小原台事務局長として、同窓会の活動の原動力になりたいと考えています。

3 防大生活は統合運用の原点

統合幕僚会議が廃止され統合幕僚監部（以下、「統幕」という。）が新編されて今年で6年目になりますが、私は創設期の統幕で運用第1課長としての勤務を経験しました。当時の統合幕僚長は第2代統幕長の斎藤海将、副長は下平空将、そして運用部長は林陸将と、各自衛隊の名だたる将官が配置されていました。統幕の主力、統合運用の主幹部である運用部は、運用第1課と運用第2課に分かれており、それぞれの課長を補佐する陸上、海上及び航空の調整官が配置され、各班の班長及び国際協力室などの室長には、同じく陸上、海上及び航空の自衛官が補職されていて、当に陸海空自衛官の協働体制となっています。

私の課長在任間の主要な業務は、我が国周辺の警戒監視の最中に発生したロシア機による領空侵犯への対応、洞爺湖サミットにおける航空テロへの対応要領の確立、そして北朝鮮のテポドンミサイル発射への対応などでした。弾道ミサイル対処では、防衛力整備と同時並行的に運用態勢の確立が求められ、態勢が整い次第、運用するといったスピード感のある業務を実施しました。

このような状況の中で、たとえば航空自衛官が陸上又は海上自衛隊の運用をも担当することは、非効率であるとも見えますが、3自衛隊を統幕長が一元的に運用することにより、3自衛隊の相乗効果を発揮することができるとともに、タイムリーな行動がとれることから、結果を求める時代のニーズを達成するためには非常に効果的な体制であると勤務を通じて実感しました。統幕長の業務を支えるのが、陸海空自衛隊の運用の縦のラインと、統幕に所属する陸海そして航空自衛官の協働態勢なのです。各幕僚は出身自衛隊や各特技のスペシャリストというバックグラウンドを持っていますが、他自衛隊や同じ自衛隊でも他特技に精通した者はいません。ただし、防大出身者が大半を占める幕僚同士は、小原台で学生舎生活をしてきたことや同じ校友会に所属していたり、対番関係であったり、何らかの共通の価値観を有しており、防大卒業生であるということが、陸海空自衛官が協力的な幕僚業務を実施する上での精神的基盤となっていることは間違いありません。

統合運用の権限は統幕長に一任されるようになったわけですが、人事権などの行政的な権限は各幕長が持っているため、真の統合運用はできないとの意見があるのも事実です。しかし、統幕での勤務を通じて、防大卒業生であるということが、統合運用の現場における実務処理の潤滑剤になっていることを実感しました。そういった意味で、在校生の学生諸官には学生舎生活や校友会活動などで大いに切磋琢磨し、将来の統合運用の基礎を育むことを期待しています。

4 おわりに

現在防衛大学校では、防大改革が推進されるとともに、創立60周年を来年迎えるための各種準備が始まっています。組織論的に言うと、40年から50年が組織の寿命といわれていますが、防大は時代の要請に応じて果たすべき役割を自覚し様々な変革を実施してきており、その結果、現在に至るまで社会に対する責任を果たし続けています。防大は防衛省・自衛隊のみならず国民全体の貴重な財産です。五百箇頭校長の下で防大改革を着実に推進し、良き伝統を基に新しき伝統を創造していかなければなりません。このような時期に、新防衛学教育学群長として小原台で勤務できたことを誇りに思うとともに、改革の着実な推進に、微力ながら貢献したいと思っています。



小原台は今

平成23年度前期校友会活動主要成果及び部員状況（運動系）

校友会名	部員数		活動状況
	男子	女子	
応援団リーダー部	11	0	短艇全日本応援 相撲東日本選手権応援 他各部等応援の実施文化部合同発表会 弥生苑における演舞
短艇委員会	51	0	全日本カッター競技大会 5位
バスケットボール部	38	10	男子 関東学生リーグ戦5部リーグ横浜 エリア 2位
			女子 春季神奈川リーグ2部 4位
柔道部	49	3	関東学生団体2部 3位
ラグビー部	144	0	関東学生リーグ戦3部、関東学生クラブ 選手権4部参戦
			定期戦 防大0-63 筑波大学 定期戦 防大51-0 京都大学 定期戦 防大43-0 東京大学
サッカー部	47	0	春季リーグ戦5位
剣道部	74	5	特記事項なし
空手道部	52	5	日本空手協会神奈川県空手道選手権大会 男子形個人 3位
			日本空手協会春季関東学生会定期リーグ戦 男子1部リーグ 準優勝
バレーボール部	55	27	男子関東リーグ戦 3位、6部昇格
			女子関東リーグ戦 3位
卓球部	17	1	特記事項なし
陸上競技部	126	10	関東学生対抗選手権大会砲丸投げ優勝 第43回関東理工系学生対校陸上競技大会 団体 5位
硬式庭球部	52	8	関東理工科リーグ戦 男子4部 2位 女子9部 2位
硬式野球部	57	0	神奈川大学野球春季2部リーグ戦 4位 (6勝6敗)
射撃部	15	1	関東学生ライフル射撃選手権春季大会2部 2位 関東学生デジタルピストル大会個人 6位入賞
山岳部	7	0	金峰山、ハケ岳、広沢寺、剣岳・飛騨山脈、 三つ峠登山 大学生登山リーダー春山研修会参加
水泳（競泳）部	32	4	全国国公立大学選手権水泳競技大会出場 総合 9位 日本学生選手権水泳競技大会出場
水泳（水球）部	18	0	関東学生水球リーグ2部 7位 東日本水球リーグ2部 11位
ハンドボール部	24	0	関東学生ハンドボールリーグ 7位 5部2位と入れ替え戦
アメリカンフットボール部	74	0	特記事項なし
ヨット（小型）部	22	0	関東学生ヨット新人戦及び個人戦出場
ヨット（クルーザー）部	12	1	イタリア海軍士官学校杯出場20校中20位 相模湾横断（夏合宿）

校友会名	部員数		活動状況
	男子	女子	
グライダー部	23	2	久住山岳滑翔大会出場
銃剣道部	36	0	男子特記事項なし
	0	5	女子特記事項なし
ソフトテニス部	35	1	関東学生リーグ戦6部優勝5部昇格 関東学生2部リーグ（オープン） 3位
ボクシング部	25	0	特記事項なし。
レスリング部	24	0	東日本学生リーグ戦1部Bリーグ8位 全日本学生選手権出場、春季新人戦60kg・ 84kg優勝
ボート部	41	0	五大学レガッタ新人ナックル：4艇中 1位、フォアα：3艇 中 1位、フォアβ：3艇中 3位、エイト：5艇中 5位 全日本学生選手権大会／オックスフォード盾レガッタフォ ア：予選5艇中 5位、エイト：準決勝4艇中 3位
			男子春季関東学生ホッケーリーグ2部昇格 (3部1位)
フィールドホッケー部	42	0	男子春季関東学生ホッケーリーグ2部昇格 (3部1位)
	0	16	女子春季関東学生ホッケーリーグ2部降格 (1部8位)
ワンダーフォーゲル部	21	0	尾瀬、丹沢山系、甲武信ヶ岳、南アルプス、 飛龍山登山実施
パラシュート部	14	0	日本選手権大会Jrの部優勝
準硬式野球部	60	0	神奈川大学準硬式野球春リーグ戦1部リー グ 3位
合気道部	53	4	全日本合気道演武大会出場
体操部	33	4	特記事項なし。
弓道部	35	6	男子：関東学生春季男子リーグ戦1部 2位、 関東大会決勝出場（入賞ならず）
			女子：春季トーナメント及び団体戦、関東大 会参加、予選敗退
少林寺拳法部	53	4	関東学生大会団体演武の部 2位 三人掛けの部 5位入賞
フェンシング部	19	0	関東公立大会団体エペ・フルーレ参加
ウェイトリフティング部	15	0	国体県代表選手権兼関東選手権大会入賞
相撲部	13	1	全国国公立学生大会 団体の部 優勝 個人の部 男子 3位、女子 優勝
			全国学生相撲個人体重別選手権大会 65kg未満級 第3位入賞
バドミントン部	33	5	秋季関東学生リーグ5部 3位
居合道部	13	0	正統関東大会 初段の部：優勝・2・3位 2段及び5段の部 優勝 無双直伝英信流関東大会 5段の部 優勝 2段の部 3位
			学校行事における音楽演奏
吹奏楽部	20	5	空白
儀仗隊	58	10	入校式典儀仗
			文化部合同発表会ドリル展示

平成23年度前期校友会活動主要成果及び部員状況（文化系）

校友会名	部員数		活動状況
	男子	女子	
アカシア会	10	14	サマーダンスパーティ実施 [6月]
			文化部合同発表会ステージ発表 [6月]
放送委員会	7	6	学校行事における放送
茶道部	16	4	文化部合同発表会参加 京都表千家研修会参加
弁論部	2	0	特記事項なし
英会話部	13	1	自習時間を利用した勉強会実施
写真映画研究部	7	2	各種競技会における写真撮影及び支援 文化部合同発表会におけるステージ発表等
棋道部	19	0	春季関東大会五部4位
音楽部	36	13	文化部体験日における展示 文化部発表日におけるステージ発表
軍事史研究部	8	0	特記事項なし
軽音楽部	23	1	文化部合同発表会におけるステージ発表
国際関係論研究部	6	1	慶應大学、早稲田大学との3校合同中国問題研究会
古典ギター部	5	1	文化部合同発表会参加
自動車同好会	8	0	特記事項なし
美術同好会	3	0	特記事項なし
文芸同好会	10	0	特記事項なし
詩吟同好会	5	0	文化部合同発表会参加
書道同好会	9	0	文化部合同発表会参加
生花同好会	5	0	特記事項なし
校友会名	部員数		活動状況
	男子	女子	
タイ文化研究同好会	24	6	文化部合同発表会参加
韓国文化研究同好会	8	7	文化部合同発表会参加
紅太鼓同好会	0	9	文化部合同発表会におけるステージ発表
インドネシア文化研究同好会	12	1	文化部合同発表会参加
防衛学研究同好会	11	3	文化部合同発表会におけるステージ発表 防衛学セミナー参加
ベトナム文化研究同好会	22	8	文化部合同発表会参加
モンゴル文化研究同好会	13	1	文化部合同発表会参加
自転車同好会	25	0	宮古島トライアスロン 個人競技 298位 (年代別8位) 2nd TIOGA ふじてんMTB CARNIVAL 男子チーム 4位
模型製作同好会	13	0	文化部合同発表会参加
コンピューター研究同好会	15	0	文化部合同発表会参加、部内発表会 (第一回)の開催
カンボジア文化研究同好会	11	3	特記事項なし
ダーツ同好会	20	3	文化部体験日における展示 DART HiVe Tournament 2011 福倉・村山ペア8位
校友会学生委員会	36	2	代議員会 (9月：校友会積立基金の借用： 開校祭関連)



吉田茂の防大卒業生への願い



平間 洋一（1期・海上）

吉田総理邸訪問の経緯

「自衛官が冷遇されているときの方が国民は幸せなんだ。耐えて貰いたい」との吉田総理の遺訓は、一期生卒業式の訓示であったと多くの人が語り書いていた。しかし、今さらそれは私が聞いた言葉であるなどと名乗り出るのも大人気ないと沈黙していたが、同窓会から依頼があったので経緯を書くことにした。卒業アルバム編集長であった私は、内外諸大学の卒業アルバムを集めたが、米陸軍士官学校のアルバムが一番立派であった。それを業者に見積もらせたところ一万円ということであった。当時の常識に従って二〜三〇〇〇円で妥協すべきか否かを迷っていた時、目に止まったのが聖心女子大学のアルバムに掲載されていた広告であった。「そうだ！広告を載せよう」と衆議一決。電通の宣伝部長（？）が陸士出らしいと聞き、早速広告募集の依頼に行ったところ、「三〇〇万ほどあればよいね」と気安く引き受けてくれた。



一ヶ月ほどは何の話しもなかったが、電通の部長が友人の防衛庁高官（事務次官であったと思う）に、「今、一期生に頼まれて広告を集めている」と語ったことから防衛庁内は大騒ぎ。広告を載せると報告すれば「止めよ」というに決まっていると報告しなかったことから大変なことになってしまった。校長室に呼ばれ温厚な横校長から「防衛庁のレベルで物事は考えなければならない。他人のお金を当てにして卒業アルバムを作るなどでの外」と一喝。私も負けずに「経済の気賀建三講師（当時・慶応義塾大学経済部の教授）から、現代の資本主義経済は他人の金（株）で事業を展開する時代だと習いました」と反論したが、厳しく反論され散々油を絞られた。しかし、広告掲載を前提に発注済との説明に、校長は仕方ない私も資金について考えようと言って下さった。

一週間ほどして校長秘書から校長室に来るようにとの連絡があった。おそろおそろ出向くと、校長は前回とは打って変わって上機嫌、寄付の協力を得るならば、防衛大学校に愛情を持っている人から戴くべきで、吉田元総理と木村元防衛庁長官に話したら、「喜んで出してくれました」と金一封を渡された。しかし、吉田総理は「どんな学生が出来たかね。学生と直接話をしたいので、是非とも学生をよこすように」と言われたので、「平間君、今度の日曜日に行ってらっしゃい」ということから吉田邸訪問となった。このようなわけで、この訪問は品行方正とか学業優秀とかとは最も遠い私が行くことになったのである。「どのような学生が出来たかね。家によこしてくれ」と言う総理も総理ならば、このヤンチャ学生に行ってらっしゃいと注意一つ与えず行かせた校長も校長のように思う。しかし、このような校長であったからこそ、吉田総理に初代校長として選ばれたのであろう。

大磯の吉田邸の訪問

それは昭和三年の卒業直前の二月初旬のことであった。アルバム編集委員の陸海空の三人がアルバムに総理の写真を載せようと、総理の嫌いなカメラをぶら下げて出掛けた。しかし、住所が大磯とは知っていたが、調べようにも調べようがなく、とにかく大磯駅まで行って、駅前の駐在所で聞けば判るだろうと大磯駅に着いた。しかし、駅前に駐在所はなかった。通り掛かった人に、「あの、吉田総理のお宅はどちらでしょうか」と聞いたところ、一瞬げんな顔をしたが、海の方に向かい国道にぶつかったら、右に曲がり松並木の道に沿って行けば大きな木に囲まれた家なのですぐ判ると教えてくれた。歩くこと10数分、大きな木に囲まれた家はあるが門にも玄関にも表札がない。そこで再び屋敷外に出て通行人に、「ここが吉田総理のお宅ですか」と聞くと、「この家です」との返事。そこで勇気を出して呼び鈴を押した。しかし、なかなか人が出て来ない。それはそうだろう大きな家だもん。多少不安になったころ坂本喜代子さん（吉田総理お気に入りの元芸者・小りんさん）が現れた。「あら、玄関からとばかり思っていたのに勝手口から来るなんて」といわれた。われわれは大磯駅に近い勝手口から侵入したわけだ。

勝手口から応接室に坂本さんはわれわれを案内して出て行った。落ち着いたふりをして周囲を見渡す。正面には世界各国の元首や大統領のサイン入りの写真が四段か五段のボードに並び、目の前のテーブルには菊のご紋章の付いたシガレットケースが置かれ、その雰囲気はさすが心臓の強い私しもたじたじだった。待つこと数分、階段から人の降りてくる気配を感じたが、驚いたのは着物を着て白足袋を履いておられたことだった。総理を風刺した新聞などの漫画に描かれているそのままの姿、

まさか家でも白足袋に袴とは思っていなかったもので、そのときの驚きと興奮は今でも忘れられない。葉巻をくわえ白足袋、和服に袴のいで立ちは漫画で見たとおりだったが、その実物がここに居られると思うと身が奮えた。しかし、総理は上機嫌で、われわれを愛でるような慈悲に溢れた目で眺め、笑顔を向けられたのにはほっとしたことを覚えている。



学校のことや自衛隊に対する期待など色々なお話をされたが、会話というよりは総理の一方的なお話で、座談の名手という感じを強く受けた。お話しも一段落したのでおそろおそろ「総理は写真が嫌いと聞いておりますが、卒業アルバムに載せたいので一枚取らせて下さい」と申し出たところ。「写真は嫌いではないが、カメラマンは悪いシーンばかり撮ろうとするから嫌いだ」、「君たちが撮るのより良いのを送るから、それを使ってくれ」と言われたので、図に乗って色紙もお願いしますと申し出たら、「治において乱を忘れるな」との色紙も送って下さった。

吉田総理との会話

話題は主として防衛と防衛大の教育問題であったが、昔のような片輪な人間を作ってはならない。東大出は固くて分らず屋が多いので駄目だ。校長を決めるには随分考えたよ。昔のような軍人を作らないために。それにはイギリス的教育を受けた人が良いと思い、慶応から来て貰った」だけは覚えているが、あとは記憶にない。総理の一方的な話ばかりだったように思う。

このようなお話をされている間にも来客があるらしく、坂本さんが何回も取り次ぐが、そのたびに「今学生さんと話している。待たしておけ！」が三回ほど続いたであろうか、吉田総理は坂本さんと呼び「学生さんは若いんだから、腹を空かして帰す訳にはいかない。何か食べさせてやりなさい」と言われ、われわれは応接室からダイニングに入ろうとした。その時に立ち上がり、「君達は自衛隊在職中、決して国民から感謝されたり、歓迎されることなく自衛隊を終わるかも知れない。きっと非難とか誹謗ばかりの一生かもしれない。御苦労なことだと思う。しかし、自衛隊が国民から歓迎され、ちやほやされる事態とは外国から攻撃されて国家存亡の時とか、災害派遣の時とか、国民が困窮しているときだけなのだ。君達が日陰者であるときのほうが、国民や日本は幸せなのだ。一生ご苦労なことだと思うが、国家のために忍び堪えて貰いたい。しっかり頼むよ」といわれた。

ダイニングで大阪寿司をご馳走になり、吉田邸を辞し

たのは夕方に近かったように思う。玄関横の待合室には大勢の人が来ているので勝手口から帰ろうとしたら、坂本さんから「将来のある人が勝手口から帰るなんていけません」と、注意され玄関から外に出た。高い松の木のあったのと、庭の和風の建物、後でそれが五賢堂（明治の五元老を祭っている）と知った。一五から二〇メートル歩いて正門を出たが警官はいなかった。現在であったならば、機動隊員がいて勝手口から入るようなことはできなかったであろう。学生を大切にし国民を信頼していた良き時代に育ったことを感謝するとともに、良き時代が過去のものになってしまったことを寂しく思う。



昭和五九年に吉田総理の人間的な側面を後世に残そうと、吉田茂記念財団が著名な政治家や外交官、学者など三〇余名で総理の業績や思い出などを出版することになり、私は吉田邸訪問記を依頼され『人間 吉田茂』（中央公論社）に書いた。この本の出版を契機に墓前祭に参列することになり、再び坂本さんと二五年振りに再会した。坂本さんは「七〇〇頁もある本なのに、私のことを書いてくれたのは、あなた様だけでした」と語り、墓前祭では偉い人ばかりで知人が少ないので、その後の墓前祭では坂本さんとばかりお話をしたが「防衛大に行く日は、旦那様は朝から機嫌が良く、そわそわしておりました」以外は、「ご遺族にご迷惑がかかるので」と一切政治的なことは語らなかった。その後は坂本さんも亡くなられたので墓前祭も失礼していたが、平成八年一月に来年は吉田邸を神奈川県に寄贈し、内部の見学も制限されるので参加されてはと、吉田記念財団から知らされ久しぶりに参加した。大阪寿司を頂いたダイニングは改良され、応接室のソファなども変わっていたが、間違えて入った勝手口や総理が降りてきた階段は変わってなかった。「二階もどうぞ」と言われ総理の居間を拝見したが、大きさは六畳くらいだったろうか、真ん中に座卓があり、その右側の袋戸棚の中には官邸との黒いダイヤル式直通電話が隠されていた。「ここに座って国家の未来を考えていたのですね」と言うと、「座って良いですよ」と言われ写真を撮って戴いたのが、この写真である。

お願い探して

ここに示した色紙とサイン入りの写真は、私が定年を迎えた平成六年の二月か三月に訓練部長の部屋で防衛大学校記念館建設担当者に手渡したが、その後に防衛大学校記念館準備室が出来て資料を移管した時に、所在不明になってしまったようである。折りがあれば引っ越しの時に資料を入れた段ボール箱などを探して戴きたい。

生涯スポーツを楽しむ

石村 正雄(17期・陸上)

私がトライアスロンと出会ったのは今から18年前の平成5年、施設補給処(古河)に転属になって直ぐのことでした。

当時業務隊の厚生班長だった定年間際のK氏が、佐渡のトライアスロン大会に出場すると聞いて、何ですかそれは?と質問したのが始まりです。「55歳の初老の人(その時はそう見えたのです。)に12~14時間もの連続運動ができて、僕にできないわけがない。」42歳の青年は早速、K氏にバイクの購入先を紹介してもらい、巢鴨のトライアスロン専門ショップまで出向きボディサイズを測り、オーダーメイドのロードバイクとウエットスーツを手に入れたものでした。スイムとバイクとランを連続して行い総合タイムを競うのがトライアスロンです。その全行程を自分の力をコントロールしながら完走を目指す忍耐力と持久能力が要求される競技です。



当然ですが、まずはショートディスタンス(スイム1.5km、バイク40km、ラン10km、トータル51.5km)の挑戦から始めました。古河市に隣接する渡良瀬遊水地の周りをバイクで駆け巡ったり、市営のスポーツ施設でスイムをやったり、ランニングは自宅周辺の一般道路をコース選定して、たまには妻と一緒に走ったものです。そして1年後の7月下旬、真夏の太陽が照りつける渡良瀬遊水地での大会に臨みました。スイムはプールで泳ぐのとは大違いで、コースロープがない水面を折返し点のブイを目標に泳ぐのです。遊水池は流れがないので褐色に濁っていて着水した手の先が見えないくらいです。そこをブイに向かって真っすぐに泳ぐことがどれほど難しいことか、結果は蛇行を繰り返してスイムゴールに予測より5分も遅れての到着でした。湖岸から応援していた妻は諦めモードでした。引き続きトランジットエリアでバイ

クウェアーに着替えてエネルギー補給ジェルを一飲みして40kmのバイク周回コースに乗り出すと、練習通りのスピード配分で風を切って走るのが心地よく感じました。ランは、学生時代に断郊2区隊で走るほどでそこその心肺能力もあり、好きなスポーツの一つで、苦しむことなく10kmを走り終えて最終ゴールにたどり着きました。総合順位は中間位だったでしょうか、初回にしては満足な結果でした。

それからは転属の度に場所を変えては各種の大会にエントリーしてこのショートディスタンスを、また、シーズンオフの冬場にはフルマラソンを楽しみました。最初に手ほどきを受けた古河の大先輩のことは忘れて…70歳を過ぎた今でも元気で再挑戦の意欲を示すくらい先輩です。定年を迎え第2の職場で働きながら同期生が還暦を迎え始めた一昨年秋のこと、継続的なトレーニングができて体調管理も上手く行き、それまで65kgを維持していた体重が60kgを下回ったのです(学生時代は55kgでした。)。不安もありましたが、フルマラソンは勝田全国マラソンでサブ3.5hを確保したし、バイクの長距離トレーニングも積んできたし、スイムマラソンで5000mを程良いタイムで完走できているし、これを連続してやりとおす体力(持久力)と忍耐力があればなんとかなるさ…と考えて2010佐渡国際トライアスロン大会A(スイム3.8km、バイク190km、ラン42.2km、トータル236km)のエントリーを決めました。でもその前に、少し短い距離をクリアしておきたいと思い、佐渡の2か月前に行われる第30回全日本トライアスロン皆生大会(スイム3km、バイク145km、ラン42.2km、トータル190km)にもエントリーしたのです。

皆生の結果は、家族の同行応援も力となり12時間18分で家族同伴でゴールテープを切り完走。総合順位は353位/750名、年代別(55~59)では17位/69名でした。これで佐渡の完走は見てきたとの思いでトレーニングを持続し、ほぼベストの体調で臨んだ佐渡国際トライアスロン大会では、真野湾の穏やかな海面を伸び伸びとマイペースで泳ぎ、日本海に面した鮮やかな海岸線の景色を堪能しながら大佐渡・小佐渡をバイクで踏破し、佐和田の平地を駆け巡り、13時間32分で完走、総合202位/700名、年代別7位/70名で、完走者全員にアストロマンの称号が与えられました。

しかしながら、レース中の自分との戦いは3,4行では言い表せない壮絶なものでした。スイム直後のバトル(ゴーグルが外されるなど…)、バイク後半での登り坂での太ももの痙攣、ランでの脱水症状による無気力感の強襲等々……全ては体験してみないと判らないことでした。

還暦を過ぎた今年はその成果を拡張して、4月には全日本トライアスロン宮古島大会に参加して総合403位／1300名、年代別（60～65）で15位／80名の結果を残し、さらにはマラソン仲間におだてられてエントリーした6月末のサロマ湖ウルトラマラソン（100km）では、前半のハイペースが後半のペースダウンを招き、目標のサブ10達成はできなかったものの、サブ11を成就しました（正式記録は、10：56：32）。

その2ヶ月後が「2011佐渡トライアスロン大会」（9／4）です。今年は年代別入賞（3位以内）が手に届くかもしれないとの密かな思いからトレーニングを積み重ねてきたつもりでしたが、サロマ湖の疲労の蓄積やら慣れない仕事で重量物を運搬したことが災いしてか、7月下旬から右大臀筋の内側が痛み出したのです。鈍痛は一向に治まる気配がなく、それまでのトレーニングの量を半分以下に落とすとともに整形外科や鍼灸院で治療を繰り返して、なんとか佐渡大会に臨みました。

折から佐渡に接近してくる台風12号の影響でスイムが3.8kmのところを2kmに短縮となり競技がスタートしたものの、強風に煽られて思うように進めないバイク。大腿部の痙攣は去年より50kmも手前で発生し、制限時間一杯（8時間）でトランジットエリアに到達してランに移行。後は完走を目指して脚を前に繰り出すことのみを考えて家族と仲間の待っているゴールを目指しました。それでも残り1km地点の佐和田のアーケード街に差し掛かると、気力でラストスパートを掛け、一人、また一人と追い抜いて家族同伴でゴールテープを切ったのです。密かな目標にはほど遠かったのですが、体調不良のコンディションで完走できたことに満足しています（総合408位／810名、エイジ9位／24名）。それにしても、周りを見渡せば還暦を過ぎたアスリートが色々な分野で元気に活躍していることに驚かされます。私もさらにモチベーションを維持して静かにトレーニングを重ねつつ、家族や仲間との絆を大切にしながら生涯スポーツとしてこの「超持久運動のトライアスロン」を楽しみたいと思う今日この頃です。



ゼロからの挑戦

與國 洋(17期・陸上)



長い単身生活から解放され、福岡県春日市での1年8ヶ月余りの勤務を最後に平成18年4月1日退職、翌4月2日より自衛隊の基盤から民間の基盤に乗り換えての新たな人生をスタートさせました。自衛隊での勤務を振り返る時間的余裕もなく、切り替えがスムーズに出来るかとの不安は感じたものの新たな職場は順調な滑り出しでした。そこに飛び込んできたのが、自衛隊OB議員から翌年の市議選立候補への誘いでした。自衛官として宣誓した「……政治的活動に関与せず、強い責任感をもって……」を過大に解釈し、政治への関心までも軽視していた私にとって、この話は完全に空白を突かれた大きな課題となって押ししかかってきました。私は、業務隊等の勤務を通じ自治体との深いつながりの保持こそ部隊等の円滑な活動を継続するために重要であり、OB議員の存在の意義を十二分に感じていましたが、いざこれを自分が担うとなれば話は別です。選挙といえすぐに「地盤、看板、カバン」、「猿は木から落ちても猿だが、選挙で落ちれば……」などのいわれが頭を横切ってきます。ましてや地域に密着できる市議として在住わずか二年半たらずの新参者の私が信任を得られるのか、また妻の協力、再就職直後の離職による後輩への影響、そして経費の確保などの多くの問題が一挙に降りかかってきます。これらをそれぞれ分析すれば、確信できるものは何一つなく、誰が考えても結果は「ノー」ということになります。悩みに悩んだ末、「石橋を叩いては渡れない」という前向きな考え方と、定年後の人生、今まで育くんでもらった自衛隊のため、社会のために恩返し出来るのであればこれに向き合うのもよし、また誘いを受けるうちが花道という気概を重視し、未知の市議選への挑戦を決意しました。立候補に向けての活動中、多くの不安に度々直面しましたが、目標の確立後はぶれることなく戦いの原則で学んだ「集中」をモットーとして準備を進めました。今振り返るに、妻の協力と、防衛大学校、幹部候補生学校の同期生に積極的なサポートをもらったことが大きな後ろ盾となり、選挙という関門を無事通過することが出来たと感謝しています。

地方議会は、年4回の定例会を中心に地域の課題や施策について議論し、その結果として条例や予算に具現していきます。直接市民から選ばれ市政を執行する市長と議会との関係は、二代表制となり相互に牽制する仕組みですが、これに対応するため議員としての活動状況をこまめに市民に報告するとともに、各施策の理解並びに市民の関心事に耳を傾けることが議員活動の必須の条件

と思い、努めて多くの会合や行事に参加しているところです。また、施策評価の基本に、自ら行う自助、共に支え合う共助、そして行政の行う公助のバランスを常に念頭において活動をしているところです。出来るだけ具体的な目標を持ち、かつこれに向かう活動に満足できることこそ男盛りの原点であると感じています。そして、今その中にいると自覚しています。

私は、今年4月の選挙で再び活動の機会を得ることが出来ました。今まで、自衛隊OBを市の防災官として活用することなど具現できましたが、引き続き自衛隊や社会に恩返しができるよう活動目標を堅持し、ぶれずに動き続けたいと考えています。

サムエル・ウルマンは「青春とは」の詩の中で、「人は信念と共に若く、疑惑と共に老いる。希望ある限り若く、失望と共に老朽化する。」と表現しております。まさに挑戦の精神を論してくれていると思っています。

動けば必ず流れが生まれ、動くほどその流れは大きな力となります。この動きが人のため、社会のためと考えられるものであれば最高と感じ、毎日活動を続けています。

出直して医師、そして今

基礎工学Ⅱ 短艇委員会

矢野 光政(17期・海上)



3月の東日本大震災では多くの方が犠牲になられ心を痛め、災害派遣で出動されご苦労された同窓の皆様のことを思い胸熱くしておりました。一日も早い復興を願っております。

さて、このたびは、同期生からの依頼により、私でよいのかとの思いの中での投稿です。

ところで、「男盛り」とは、ある辞典によると「男が心身ともに充実し、元気一杯働ける年代。多くは30,40代をいう。」とあります。確かにその年代の私は、海上自衛隊では駆け出しながら、回転翼航空機の操縦士、戦務掛研究班員として頑張り、転身して医学生として勉学に励み、医師となり勤務医として多忙な毎日を送った年代でした。還暦も過ぎた今、私の男盛りは過ぎたのでしょうか？ 有名な彫刻家である平櫛田中という方が、「六十、七十、はな垂れ小僧、男盛りは百から百から、わしもこれからこれから」という名言を残されています。107才で亡くなっていますが、100才を超えてなお創作意欲旺盛だったそうです。そのことを考えれば私はまだはな垂れ小僧。これは自分を磨き続け頑張らないといけないという戒めのようにも聞こえます。男盛りは年令

ではなく、『男が、何かに一所懸命頑張っているときに男盛り』と都合よく解釈することにします。

私は、今から31年前、海上自衛隊を1尉の時に退職しました。機長にして頂いて間もない頃であり、操縦士としても幹部自衛官としてもこれからの立場でありました。育てて頂いた防大・自衛隊に不義理になることも認識していましたが、自衛隊への想いもあり悩みました。しかし、結局は、身内の依頼から始まった医師への道を、より身近な使命感の様に感じ出直すことにしました。当時子供が2人（現在3人）おり、一旦踏み出したからには引き返すことも出来ずのプレッシャーが幸いしたのか、翌春には医学部学生となることが出来ました。その後の6年間は、毎日を短艇委員会体操でスタートし勉学に励み、卒業、医師国家試験までをスムーズに通過し医師となりました。

医師は、勤務医で終える人もいれば、勤務医の経験の後に開業する人もいます。私も勤務医として10年近くを過ごし、やりがい・将来のことなどを考えて診療所を開業することにしました。

そして今年、開院して15年が過ぎました。これまでに3万数千人の方を診察させて頂きました。開院当初受診した赤ちゃんが高校生になり、当時の中・高校生が自分の子供のことで相談に来てくれる。近所の高齢の方が受診時にとれたての野菜をくださったり……。そんな時、ある種の幸福感を感じることがあり、これが地域医療なのかと思うようになりました。診療所の日常は外来診療が主ですが、診療時間外に、往診（近くの病院、老人施設、個人宅での診察）、予防接種・就学時健診への参加、医師会立看護学校での講義などをしております。また、定期的な勉強会・学会には積極的に参加しています。

開業するということは、診療の仕事の他に、経営という面倒な仕事もついてきます。医療環境整備のための借り入れ・支払い、職員の雇用・厚生などに特に神経を使います。当院は、これまでのところはスタッフにも恵まれ順調に推移しており、今後も時代に遅れない診療環境を維持したいと思っています。

休みの日は、ドライブ、町歩き、映画、森林浴、史跡巡り、ゴルフなどをしてありますが、趣味といえるほどのものはありません。すぐにでもシングルと評価してもらっていたゴルフも一歩手前で水平飛行中。趣味にと思って始めた油絵も数年間でお休みの状態です。気晴らしの世界から一歩進んで趣味と言える領域に入れるようになると良いのですが。

様々な制約もあり、年相応に打ち込める何かがあればそれで良しとし、日々黙々と暮らしています。私は、国防も医療も家族団欒を守るためのものではないかと思っています。「男が家族を守るために懸命に頑張る。」それも又男盛りではないかと思えます。とはいえ、平櫛翁の言葉によれば私はまだまだはな垂れ小僧。今後、社会のため、ひいては家族のために、更に頑張らなくてはいい

ないのかもしれない。

天職と思っていた自衛官から、転身して医師となり生きていますが、防大・自衛隊で培った精神的な支柱が今日の私を形作っていると思っています。今後も、防大出身であることを誇りとし、自衛官らしさを失わないことを喜びとし、早くに殉職した同期生の為にも、世のため、人の為になることを探しつつ暮らしたいと思います。

定年後の活動

児玉 芳雄(17期・航空)



航空自衛隊定年後、6年が経過しました。その間に活動したことを紹介します。

1 仕事

過疎化が進む山間地では限界集落などと呼ばれるところもある故郷宮崎県において、定年後には山の仕事で微力ながら役に立ちたいと新田原基地援護室に申し出ました。たまたま森林組合の仕事が見つかり定年直後の2月から山林作業員として働くことになりました。

最初の仕事は地ごしらえ。伐採した際に散乱した木枝を整理して水平に2m幅の空き地を作ります。その指導にはイメージとして私の半分位の背格好の60代女性が当たり、淡々と作業を続けています。私は、木枝に絡んだ蔓を切らずに力ずくで片づけようとしてすぐにグロッキー。要領が如何に大事かを思い知りました。

3月～4月植林、5月間伐、6月頃から9月まで下草払い。

下草払いは、幼木周りの草が対象であるので木陰はなく真夏の太陽が照りつけます。風は、斜面はもとより稜線であっても意外と当たりません。蜂防止ネットを垂らしたヘルメットをかぶり、長袖、長ズボン、手袋、地下足袋に脚絆を装着し、草刈り機のエンジンの熱により文字通り汗だく、5リットルの水も飲み干し熱中症との戦い、体重は83kgから77kgまで減りました。

怖いのは蜂。「痛い!」と思った時には既にアシナガ蜂が左手甲に数匹刺しており、刃先で壊した巣の周りを蜂が飛び交っています。この時から革手袋を付けることにしました。特に怖いのはスズメ蜂。1度刺されて抗体ができると2度目にはアナフィラキシーショックとなり死亡例が多いと言われています。巣に近づくと、スズメ蜂は歯をカチカチさせたり、威嚇飛行したりするので比較的早く気付くことができますが、エンジン音で聞こえないし、目に入った汗と曇ったバイザーでスズメ蜂を認識し難いものです。私は、間一髪で巣を発見すること数

回、事なきを得ました。

ほぼ1年経ち山林作業員として一人前になった頃、新田原基地援護室から西都市役所の防災の仕事提案してきました。当初拒否しましたが、5空団司令、西空司令官から推薦されていると聞き、空幕で防災の仕事をしたOBはそうはいまい、経験を生かして地域に貢献することも大事だと考え直し転職を決意しました。

平成18年4月、西都市役所に新設された危機管理係に危機管理専門員(嘱託)として勤務することとなりました。毎日9時出勤、4時退庁。金曜日には15時退庁。

着任後直ぐに、前年の大雨により山間地に大規模土砂崩れのおそれのある亀裂ができていると聞き、現地視察を行いました。規模は最大約100万立方メートルであり、崩落すると土砂崩れダムを形成し、更に危険な状況となることが想像できました。この件は、着任挨拶のため、陸上自衛隊都城駐屯地を訪れた際、担当の第43普通科連隊重迫中隊長に情報を提供しました。偵察訓練を行うとの連絡があり、5月下旬、1泊2日で約30人規模の偵察訓練が行われました。公共施設を宿泊場所に提供することについては、市長と教育委員会の間で一悶着がありましたが、文書による解決がされました。

3人でスタートした危機管理係、右も左も分かっていない4月中旬、福岡防衛施設局(旧)の係官に同報系防災行政無線の設置要望はどうしたのかと指摘されてびっくり。西都市は、新田原基地の戦闘機が離着陸する際の飛行コースにあることから補助対象として認められないかと前防災担当者が事前に問い合わせをしたらしい。早速事業に着手しました。フォーマット探しから始め、緊急に資料を作成、庁内調整においては不十分な資料では止めた方がよい等の意見の出る中、前年の大水害の教訓を活かすためには急ぐべし「当たって砕けろ!」と説得し、そして市長決裁、5月連休後にはヒアリング資料を持って福岡防衛施設局を訪れ補助申請の第一歩を行いました。その後約10日間は修正に追われました。

6月下旬には前年の台風14号による洪水災害をシナリオにして防災図上演習を実施。もちろん山間地の大規模土砂崩落もシナリオに入れました。

私の机の上にはパソコンはありませんでした。予算がないとの理由で……3ヶ月間。それまでは、私の手書き資料を危機管理係長がパソコンに入力していました。間に合わないと判断した場合には、深夜、自宅パソコンで作成しメール送信したこともありました。7月になり、私の机の上に古いパソコンが乗りました。しかし庁内ラン、メール等は使用不可。それから1年以上経った平成19年8月下旬、業務過多のため危機管理係長、危機管理対策監が相次いでダウンし、私一人になってから県等とのやり取りが欠かせなくなったため、初めて庁内ラン、メール等が使用できるようになりました。

西都市国民保護計画の作成を担当しました。

平成19年度には西都市初の本格的な総合防災訓練を

行い、陸上自衛隊都城駐屯地並びに航空自衛隊新田原基地から参加を得ました。新田原救難隊ヘリの初参加も得て山間地に想定医薬品を届けました。

台風が襲来した祭には、西都市災害対策本部に新田原基地から連絡官としてパイロット2名が入り、食料と毛布の提供が円滑に行われました。

西都市国民保護計画の細部となる避難実施要領の作成についても担当しました。

平成20年度には、土砂災害警戒情報が西都市地域に発表された時の対処要領を作成しました。また前年、土砂災害危険箇所も記載した洪水ハザードマップを作成しましたが、国土院の地図に新設の橋が表されていない等の不具合があり、大幅に修正しました。

平成21年度西都市総合防災訓練を担当。陸上自衛隊都城駐屯地、航空自衛隊新田原基地、宮崎県防災ヘリなどの参加がありました。

平成22年3月西都市役所を辞めたその夏、平成18年に手を付けた同報系防災行政無線は、デジタル電波の短所を補うため子局からアナログ電波を再送信する方式（日本初？）で完成しました。

2 社会奉仕

4年間勤め60歳となることから、西都市役所を辞めることを決意し、平成21年12月援護室に連絡（後任には後輩を推薦）したところ、その約1週間後に援護担当者とラグビー繋がりライオンズクラブの勧誘員（宮崎県ラグビー協会長）から力を貸して欲しいと誘われました。社会奉仕したい気持ちがあり、断る理由も弱いので承諾しました。

平成22年3月、その準備会議に2人目の危機管理係長の通夜のため30分遅れて到着したところ、ライオンズクラブの勧誘員から役員の発表があり「高鍋舞鶴ライオンズクラブ会長・児玉芳雄、幹事・〇〇、会計・〇〇、…」と初代会長に指名されました。

3月31日付け西都市役所を退職。バタバタと準備して4月10日に会員22名で結成会を行いました。6月下旬には認証状伝達式を予定しておりましたが、4月下旬から口蹄疫が猛威を奮い始めたため10月に延期されました。渦中の地域にある我がクラブは、口蹄疫拡散防止のために何ができるかを検討し、初めての社会奉仕、消毒作業を行うことにしました。土曜の午後、道路の自主消毒ポイントにおいて県会議員を含む会員で数回行い、下火になるとともに終了しました。失敗もあります。車両の前方下部から、車輪、運転席窓にと噴霧器で消毒液を吹きかけますが、窓が開いているのに気付かず運転手に吹きかけたことが2度3度ありました。もちろん怖い顔で怒られました。慎重さが足りませんでした。消毒されると分かっていながら何故窓を閉めていないのか運転手も馬鹿だと思います。



昨年から今年にかけて宮崎県では口蹄疫、鳥インフルエンザ、新燃岳噴火が次から次に発生し、これらに対し全国のライオンズクラブから義捐金が集まりました。特に東日本大震災に対しては、国内はもとより世界中のライオンズクラブから20億円の義捐金が集まると見込まれています。東日本大震災では、宮崎県の口蹄疫等に対して献金されたライオンズクラブ会員も被災し、20人以上亡くなったと聞いています。

献血、献眼等支援も主な活動のひとつです。8月、高鍋町総ぐるみ献血において、我がクラブは企業主等に協力呼びかけを行い、1日としては県内でも記録的な153名の献血者を得ました。また青少年の育成に重点を置くことにし、高鍋西中学校で刃物の研ぎ方、ナイフ使用法、竹とんぼの作り方等を教え、続いて高鍋東小学校では木工、毛筆教室も付加して行いました。私の年代は遊びでナイフを使いましたが、今の子供はモヤシになっています。

会長は1年交代が原則ですが、7月からの新年度も留年（任）しています。

3 ボート等

定年前の東京勤務時、平成15年世界マスターズレガッタ・フランス・ヴィシー大会、平成16年同じくドイツ・ハンブルグ大会に日本ボートマンクラブの一員としてエイト（8人漕ぎ）60～64歳の部で参戦したのが縁で、宮崎に引っ込んでからも同じく声が掛かり平成19年、韓国に遠征しました。世界マスターズではビリでしたが、韓国エイトには快勝。

平成21年5月、第2回全日本マスターズレガッタに同一員としてエイト65～69歳の部に出場。平成22年5月、第3回全日本マスターズレガッタに同じく出場し、それぞれ金メダルを得ました。



今年度、同メンバーが平均年齢70～74歳の部で出場するのに私が入ると8人合計560歳に足りなくなるので、シングルスカルで出場することとし、2月から富田浜漕艇場でシングルスカルの乗艇練習を開始しました。しかし3月11日東日本大震災以降、大津波を警戒し乗艇練習を中止、その後、被災者の49日を意識し4月29日から乗艇練習を再開しました。5月に福島県喜多方町で予定された全日本マスターズレガッタは、延期され結局中止となりましたが、9月末現在、練習回数は約100回、漕いだ距離も約900kmとなりました。60歳過ぎの体力向上は難しいし、シングルスカルの乗艇は20歳前後でもローリング・バランスが難しいと言われますが、乗艇練習を重ねると漕力、バランス感覚ともに向上していると感じることがあります。



全国マシンローイング大会は、全国各所の体育館などでローイングエルゴメーターを使用して行われ、平成16年12月から参戦しています。平成21年度60代オープンの部で全国優勝。平成22年度は2位に甘んじましたが、本年度はまた優勝を狙います。

ボートのコーチも行っています。5月～7月早朝5時、宮崎大学医学部ボート部学生は宮崎市を流れる大淀川に集合して乗艇練習するので、30km離れた高鍋から出かけます。7時頃解散。医学部の学生はよく頑張るものだと感心します。8月5～7日に大阪で行われた西日本地区医学生対抗体育大会ボートの部で女子の舵手付きクォドルプル（漕ぎ手4人がそれぞれ2本のオールを持つ）が優勝し連覇しました。ボート部員は学業も優秀らしい。私は、防大1年を留年しましたが、中には6年で卒業できず8年掛かる人もいます……

平成18年にはボート競技審判資格を取得し、新田原基地の隊員も大勢参加する新富レガッタでは、審判艇に乗り主審となって旗振りをしています。

4 書家志望

私は、平成19年5月から毎日筆を持って「60の手習い」をしています。今年は卯年、跳び跳ねる年であると言いつけ、2月高鍋町美術館に軸にして出品しました。私の作品の横には、同じ高鍋舞鶴ライオンズクラブ会員でありタイガー「土鍋釜」のコマーシャルで有名な堀内景子氏の「燃」の字が掛けてあり、格の違いを感じさせら

れました。師事はしていませんが、90歳頃には書家として認められようと思っています。

5 終わりに

私は、定年後の2月から2か月間、4月に次の職に就くまで、八甲田山に籠り深雪スキーを徹底して行い、冥土の土産にしようとの思いがありました。実際には、定年翌日から、森林組合の草払い機講習会が始まり夢は露と消えました。しかし2ヶ月も深雪スキーをしていたら雪崩等で埋もれて凍り付きそのまま冥土に行ったのかもしれない。

そして西都市役所に勤めるようになり、またライオンズクラブ員になったことなどは、人生導かれるときには従う方がよいのかもしれないと思うようになりました。

また何事も自分にとって取り組みやすく好きなことに夢中になれば「継続は力なり！」であり、「目標がその日その日を支配する」が余生を楽しくすると思っています。



防大55期生に聞く



一般幹部候補生 陸曹長
若月 豪

今年3月に防衛大学校を卒業してから早6ヵ月が経過し、幹部候補生学校での生活も後半に差し掛かってきました。入校当初は不慣れで困惑することも多かったこの生活にもようやく慣れてきました。我々92期BU課程の候補生が卒業して部隊へ行くまで残すところ2ヶ月と少しと迫っていますが、忙しい日々を追われる中ではそれほど大きな実感はありません。もちろん、不安が無いわけではありません。果たして未熟な自分が部隊で初級幹部としてまともに勤務できるのか、先人達の後に続くことが出来るのかと思っているのは私だけではないはずです。けれども、悩んでも状況が改善するわけでもありません。今は目の前にあるやるべきことを確実にやっているとと思っています。この「小原台だより」は防大同窓生の諸先輩方や現役の防大生が読むということです。経験や知識が未熟な私としては現役の防大生に対して伝えたいことを述べていきたいと思います。

さて、防大生の諸君は防大生活を満喫しているでしょうか。今になって思い返してみると防大生活は幹部候補生学校に負けず劣らず行事が目白押しでした。そのような中で、勉学、校友会、学生舎生活、訓練やパレードをこなすことは非常に大変なことであったようにも思えます。特に長期勤務学生や校友会の役員、行事の責任者に就いている者については格別の忙しさに違いありません。

しかしながら、考えてみて欲しい。君たち防大生の諸君は将来的に自衛隊の幹部となり、指揮官として、幕僚として、教官として、様々な任務に就き、公僕として国家に尽くしていくことになるでしょう。その30数年もの長い自衛隊人生において防大時代がどのような位置づけなのか。この学校に来て私自身つくづく思うのは防衛大学校が如何に有意義な学校であるかということです。防大では陸海空の要員の人間が同じ場所で勤務しています。防大時代は特に違和感無く生活していましたが、一般的な自衛官からみれば、同じ学校でそれぞれの要員の訓練を行いつつ、共に生活するということは稀な環境なのでしょう。今こうして考えますと、陸、海、空の同期

生がいて、それぞれの要員の文化や特徴を少しでも理解していることは他の自衛官にはない防大生ならではの特権であったのではないのでしょうか。しかしながら、防大を卒業してしまうと他の要員の同期生との関わりはほとんど無くなります。幹部候補生学校に入校して、唯一ありましたのが海幹候で行われた3幹候合同研修のときでしたが、数ヶ月振りの再会であったにも関わらず不思議と自然に会話を交わすことが出来ました。陸の幹部候補生学校にも、もちろん同期生はいるわけですが、数ヶ月後には部隊に配置され、全国に散れば同期生間の関わりはほとんど無くなるに違いないでしょう。しかしながら、同期生はいつまで経っても同期生です。例え防大時代に関わりが全く無かった者同士でも同期生というだけでお互いに助け合える仲になることでしょう。増して今や統合の時代です。防大時代に築いた同期生間の絆が将来の自衛隊の任務達成に役立つに違いありません。

また、防大は非常に自由な学校であったと思います。「学生主体」「自主自律」は防大生活の基本原則であると思いますが、長期勤務学生、各種行事の責任者、校友会の主将として物事を運営し、何かを達成していくことは非常に貴重な体験です。例えば大隊学生長として、大隊を運営していくとすると、その下には同じ学生ではあるものの約400人の部下が付くわけです。防大を卒業してから、それほど部隊を動かすに到るのは20年以上先の話となります。そう考えると防大時代の経験が如何に貴重な物か分かることでしょう。よって、防大生につきましては是非現在の機会を十分に活用して自らの資として頂きたい。

防大卒業まで半年を過ぎたこの時期、幹部候補生学校を意識して、あれこれ不安になっている4年生も多いのではないのでしょうか。私自身、一年前はそうであったように思います。中には卒業して退職し、別の進路を歩もうとしている者もいることでしょう。確かに、幹部候補生学校は忙しく、厳しい学校です。陸の幹部候補生学校について言えば幹部自衛官に必要な資質と技能を修得するため、売れっ子アイドルも顔負けのスケジュールをこなす日々が続きます。休みを返上して自主練成をすることも良くあります。しかしながら、その全てのことには意味があり、一つ一つが幹部自衛官となるためのエキスとなっています。もちろん、教育に当たる職員の方々も全力を注いで下さっている。だからといって、現役の防大生諸君が不安に思ったり、焦燥に駆られたりする必要は全くありません。なぜならば、幹部自衛官であるならば誰もが通過した道であり、全力で突き進めばどうかなるからです。君たちには今為すべき事があるはずです。今はそれらに全力で取り組み、防大生としての任務を完

遂して下さい。

最後に、防大での体験は何一つとして無駄ではありません。4年間を通じて醸成する陸海空の同期生間の絆、学生舎や校友会を通じて醸成されるリーダーシップやフォロアーシップは防大生ならではの特権です。防大生の諸君は忙しい生活の中でも、それぞれのことに全力でぶつかって行って下さい。それが輝かしい将来へと繋がっていくはずです。

私自身も現役防大4年生と同じような不安な状況にいます。今後は日々、人事を尽くしてぶつかるだけです。防大生の諸君も後悔が無いよう是非、防大生活を満喫してください。

最後まで読んで頂きありがとうございました。

潮気をつける



一般幹部候補生 海曹長
中村 航海

全国各地で御活躍中の防衛大学校同窓会会員の皆様、海上自衛隊幹部候補生学校学生を代表し、中村航海候補生が御挨拶を申し上げます。この度は、貴重な機会を得ましたので、本校におけるしつけ教育と生活の一部について紹介させていただきます。

海上自衛隊幹部候補生学校における伝統的な「厳しい教育」の意義とは何でしょうか。我々海上自衛官には、海上における重要な活動の数々が期待されています。海は広く美しく、人々を魅了してやまない生命の母ですが、その一方で気性が荒く、一度怒り出せば、我々を暗い底まで引きずり込む恐ろしい表情を見せます。そんな気難しい存在である海を、良き友として迎えたい我々が得るべき知恵こそ、「慣海」であり、海のしつけを身につけることであります。これらは決して一昼夜に築かれ得るものではありません。ですから、防衛大学校の4年間に夢中に駆け抜けた我々にも、その教育のために新たに1年間の歳月が必要となります。こうして、生活の中から海のしつけを感覚的に体得し、少しずつ「潮気（しおけ）」をつけていき、夢のある部隊勤務に備えていきます。

艦はよく、「浮かべる鋼の要塞」と言われます。船乗りにとって生活の場でありながら、それ自体が武器として機能する大きな存在です。そんな艦は、一人で操ることができるほど容易なものではないにもかかわらず、乗員の誰か一人が過失を招けば、重大な損傷を与え、艦を沈めてしまうことすらあります。したがって、自ずと「皆で動かし、皆で助け合う」という協力態勢が必要になります。幹部候補生学校においてこの態勢は、気心知れ合う仲間たちで作る「分隊」によって、数々の困難の克服や切磋琢磨を通じ、強く深く築き上げられていきます。分隊点検、短艇点検、武器点検、服装容儀点検といった数々の点検、または短艇競技、総短艇競技、水泳競技、球技競技、弥山登山競技、持久走競技といった数々の競技、他にも野外戦闘訓練、帆走巡航、部隊実習、米国海軍士官候補生との交流といった各種訓練及び行事は、いずれも我々に鍛練や修練の機会を与えます。さらに、学生長や室長、各種係学生や行事責任者、週番や当直勤務等を通じ、その都度試行錯誤して失敗や成功を積み重ね



ます。こうすることで、海軍の伝統精神である3S精神（注1）や、五省（注2）を思考の助けとしながら、「考え」実践する姿勢を学んでいきます。こうしてシーマンシップ（注3）を理解していき、「潮気」を少しずつ体に染み込ませていきます。

本校での生活は、厳しいだけではありません。昼間、太陽の下で訓練に汗を流せば、夜には同期生と未だ見ぬ将来を語り合います。静かで穏やかな江田島湾に面する幹部候補生学校は、立地条件に恵まれており、ここには最高の訓練環境があります。山本五十六や秋山真之も感じたであろう瀬戸内の涼風に吹かれ、広瀬武夫が何度も足を運んだ古鷹山を背に、澄んだ青い空と白い雲の下、若緑の松と流れるような白い庭園、堂々とそびえる赤レンガが並ぶ美しい情景を前に、一生懸命に駆け抜ける日々は、青春そのものと言うべきでしょう。

そんな我々幹部候補生が夢中に目指すものとは、紛れもなく部隊で活躍される諸先輩方の後姿です。国難の時にあって、頼れる存在こそが皆の目指すべき自衛官の在り方に違いありません。日々の訓練の成果を存分に発揮し、各地の部隊でそうした在り方を体現される部隊の先輩方を、我々は心から尊敬します。まだ遠くからではありますが、先輩方への憧れを抱きつつ、我が将来像と重ね合わせ、ここで日々の修練をしています。防衛大学校同窓会会員の皆様におかれましては、どうか温かい目で我々の成長をお見守り頂きたい思います。

ここからは防大生諸君に送ります。何度も申し上げるようですが、ここでの生活は厳しいものです。何故ならば、一番の強敵は、弱かった昨日の自分自身であり、一番の味方になるのは、強くなった明日の自分自身であるからです。それでも、頼れる同期はたくさんいますし、得られるものは無限大にあります。自分自身を律し、皆で強い部隊を作り、この国を安心の海で囲んでいけるような立派な幹部自衛官を目指し、日々前進していきましょう。我々も日々精進しながら、一足先に部隊で待っています。今度私達に会う時には、少しでも潮の香りがすることと思います。

注1 3S精神

作業や訓練などに取り組む際の心構え。スマート（敏捷）、ステディ（確実）、サイレント（静粛）の頭文字から。

注2 五省

学生が日々行う反省のこと。「至誠に悖（もと）るなかりしか、言行に恥づるなかりしか、気力に缺（か）くるなかりしか、努力に憾（うら）みなかりしか、不精に亘るなかりしか」の五つ。

注3 シーマンシップ

船乗りとして持つべき心構え。



定時点検



帆走巡航



持久走競技



短艇競技

空幹候校の紹介



一般幹部候補生 空曹長
清水 康晃

3月20日に防衛大学校を卒業し、同月24日に幹部候補生学校（以下、幹候校）に着校して以来「陸海の同期は元気になっているのか」などの思いを抱きながら、早4ヶ月が経とうとしています。『服務の宣誓』にある「事に臨んでは危険を顧みず」という言葉から、私たちは究極の犠牲（生命）を払って戦う組織であり、階級章を付けた制服を身にまとった今、日々その重大な責任を感じながら過ごしています。また、災害派遣活動を行なう先輩自衛官の姿を頼もしく感じます。

卒業、そして部隊勤務を2ヶ月後に控えるこの時期に、ここ幹候校において、長い人生のほんの一握りの約6ヶ月間は「何のため」にあるのか、考えてみたいと思います。

その前に、空幹候校を少し紹介します。

空幹候校では、「自ら考え、判断し、行動する」が教育理念として掲げられています。私たちは、航空自衛隊の組織後継者を期待されており、将来の航空自衛隊を背負っていく立場となります。そのため、いかなる状況であっても、自分で考え、判断し、行動し続けなければならないということです。実際の課程教育の中でも、学生主体となって行事が行なわれたり、訓練が行なわれたり、授業が行なわれます。よって、学生自らが考え、判断し、行動する場が多く存在します。

話を、空幹候校は「何のため」にあるのか、ということに戻します。まず私の考えを述べますと、『人としての“土台と軸”をつくるため』と思っています。人として、物事を『考える』ための基盤となる土台と、その考えを『判断する』ためのぶれない強固な軸をつくるためだと考えます。

では、“土台と軸”をつくるためにどうすればいいのでしょうか？1つ目は『正しくある』ということです。具体的には、物事を正しく判断することと、正しく行動することです。人の前に立つ指揮官として部下を感化させるには、指揮官の正々堂々とした姿が必要だと考えます。また、「人は鏡」という言葉があるように、部隊の姿は指揮官の姿を如実に反映すると思います。そのためにも、一時の損得に左右されない「真の正しさ」を貫く必要があると考えます。

2つ目は『自己制御能力』だと考えます。つまり自分で自分をコントロールできなければならないと考えます。

逆に、自分をコントロールできないということは、軸が定まっていないということです。東日本大震災でも、多くの自衛官が災害派遣活動を行なっていますが、そういった困難な状況であっても任務を遂行できるのには、自分自身をコントロールできているからだと考えます。

次に、3つ目は『持続する意思』であると考えます。人としての土台と軸をつくることは、短期間ではできません。目標を達成するには、小さなことを一つ一つ積み重ねることが大事であるように、これまで述べてきたことを基本に、続けていこうとする強固な意志が必要だと考えます。強固な意志を貫くためにも、自分をコントロールする必要があり、損得で行動するのではなく、正しくある必要があると思います。

よって、“土台と軸”をつくるためには、以上のようなことが必要であると考えます。「人としての“土台と軸”をつくること」は、豊かな人間性を築くことに繋がると 생각합니다。B課程（先任課程）という誇りと、組織を背負う一員としての自覚を持ち、同期と切磋琢磨しあい、“土台と軸”となる自分の意思を持った人間となれるように日々努力していきたいです。

最後に、防大の後輩へは、「自分の目標から逆算し、今、何をしなければいけないのか考え、判断し、何事にも一生懸命に行動してほしい」という言葉を送りたいと思います。



「桜華会」活動状況報告

桜華会事務局長 吉田ゆかり(40期・航空)



はじめに、昨年の未曾有の災害である東日本大震災において、お亡くなりになられた方々のご冥福を謹んでお祈りいたしますとともに、被災された方々に対し衷心よりお見舞い申し上げます。併せて、一日も早い復旧・復興を桜華会会員一同、心からお祈りいたしております。

桜華会の活動状況についてご報告いたします。

去る平成23年1月15日(土)品川プリンスホテルにおいて、防衛大学校同窓会50周年記念事業の一環として、「防衛大学校現役女子学生との懇談会及び懇親会」を開催しました。現役の女子学生1学年から4学年までの21名、女子学生OGすなわち桜華会会員62名、家族を含め総勢約110名が集い、これまでの桜華会の活動では最も盛大な会となりました。



特徴的だったのは、女性の会ということもあり、会員の子供も23名が出席しました。会場の一角に設けられた「キッズスペース」では、当日会ったばかりとは思えないほど、終始、仲良く遊んでいる子供たちの姿が見受けられました。

「防衛大学校現役女子学生との懇談会」では、各期の近況報告を始め、現役の女子学生と桜華会会員がそれぞれ情報交換等を行いました。その中で、現役女子学生1学年59期生の近況報告では「女子学生19期生、19歳の……」という自己紹介には愕然とする会員(何期の会員かはご想像にお任せします(苦笑))もいましたが、一層和やかな雰囲気になりました。また、「学生は平成生まれ?」「はい。皆、平成生まれです!」とのやりとり、またもや愕然……とはいえ、初めて女子学生が入学して

19年という月日を感じるひとときでもありました。2時間という短い時間ではもちろん話は尽きず、散会後もなかなか会場を後に出来ない参加者でいっぱいでした……

なお、細部は、防衛大学校同窓会ホームページにも掲載(2011.4.19)させていただいておりますので、是非ご参照ください!

そして、併せて実施した桜華会総会では「桜華会5周年記念行事準備委員会」を正式に発足させ、準備委員長の金野(40期・航空)から各準備委員の紹介を行いました。

桜華会は、平成19年2月10日に発会し、今年(平成24年2月)で5周年を迎えます。また、今年度は防衛大学校に女子学生が入学して20年という記念すべき年でもあります。そのようなことから、今回の記念行事については「防衛大学校女子学生入学20周年・桜華会発会5周年記念」として進めていくことにいたしました。

記念行事としては、①記念祝賀会の開催(細部は別途記載)、②記念品及び③記念誌の作成を進めているところです。記念誌は、女子1期生から継承されている対番系列表(1期の対番であった38期(男子)を含む。)や女子1期生が4学年時に発足し継承されている紅太鼓の活動状況、そして、制服や学生舎等の変遷、加えて、桜華会の発会の経緯及び名称の由来、記念品の作成過程の紹介等を盛り込んで作成しようと考えております。皆様、楽しみにしててください!

桜華会は、今後も会員相互の親睦を深めるとともに、母校のために少しでも寄与できるよう尽力していきたいと思っております。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

末筆ではありますが、防衛大学校同窓会会員の皆様の益々の御健康と御多幸を心よりお祈り申し上げます。

「防衛大学校女子学生入学20周年・桜華会発会5周年記念祝賀会」の御案内

記

- 1 目 時
24.2.11(土) 16:30~18:30(受付開始16:00)
- 2 場 所
明治記念館
〒107-8507 東京都港区元赤坂2-2-23
☎03-3403-1171



連絡事項等

平成23年度同窓会主催「講演会及び懇親会」のお知らせ

日 時：平成24年3月25日(日) 16:00～19:30

場 所：明治記念館
(JR中央・総武線「信濃町駅」下車3分)

講演会：富士の間(2) 16:00～17:15

講 師：統合幕僚長 陸将 折木 良一 氏

演 題：「東日本大震災に学ぶ」

聴講料は無料

懇親会：富士の間(1) 17:30～19:30

会費5,000円(当日受付)

出席を希望される方へ

返信用はがきにて、ご通知下さい。

期 限：平成24年2月10日(金)まで

機関誌「小原台だより」に関するアンケート調査

現在同窓会会員の皆様に配布しております機関誌「小原台だより」は、誌面の活性化等に関し皆様方の多大なご支援・ご協力のお陰をもちまして、今年度で既に第19号の発刊を迎えることができました。

既にご案内のとおり、皆様に冊子として配布しております「小原台だより」は、同時に防衛大学校同窓会ホームページ（以下「同窓会HP」という）(<http://www.bodaidsk.com/>)にPDFファイルとして閲覧できるようになっております。

現在同窓会本部におきましては、昨今の省資源化、経費の節約等の傾向に鑑み、「小原台だより」の同窓会HPでの閲覧を広く会員に推奨し、配布部数の縮減を実施すべく検討を推進しております。

昨年度のアンケート調査の結果では、「冊子配布希望者」は、606名であり、全会員の2.7%程度でございました。従いまして、今後、大幅な配布部数の縮減が可能であると推察されます。しかしながら、

①アンケートの趣旨を理解できなかった

②返信用葉書に気が付かなかった 会員の方が居られることが推察できます。

1回の調査では、趣旨の徹底及び会員の皆様の状況を十分に確認できていないことも考えられるため、本年度は全会員に「小原台だより」を冊子配布するとともに、次年度以降も冊子での情報配信を希望される方について、再度アンケート調査をさせていただくこととしました。可能な限りHPで閲覧していただけるようお願いするとともに、どうしても冊子でしか情報取得できず、冊子配布を希望される方を確認させていただくものです。

会員各位におかれましては、前述の趣旨をご理解いただき、以下のアンケートにご回答をお願い申し上げます（別封の返信用葉書にて回答をお願い致します）。同窓会HPの閲覧が不可能で冊子配布を希望する方は、必ず回答ください。

平成24年度からは、冊子配布希望者のみに限定して、連絡いただいた住所（現役会員の方も含む）に送付する方向で検討しておりますので、正確に住所等の記入をお願いします。

爾後、アンケートの内容を分析し、機関誌発刊部数の削減に反映いたします。なお、今後の会員各位への懇親会等のお誘いにつきましては、葉書等による通信、メールの利用など、別途検討いたしておりますので、何卒ご理解ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

記

＊ ＊ 機関誌「小原台だより」アンケート ＊ ＊

(質問に該当する () 内の回答を○で囲んで下さい。)

防大同窓会HPの閲覧・・・(可能・不可能)

「小原台だより」の冊子での配布 (希望する・希望しない)

平成22年度防衛大学校同窓会決算書

平成23年3月31日現在
〔単位：円〕

項 目			22年度予算額	22年度決算	備 考	
一 般 会 計	収 入	会費	18,000,000	20,165,680		
		預貯金利息	2,600,000	2,659,800		
		雑収入	50,000	99,000		
		収 入 合 計	20,650,000	22,924,480		
	支 出	母校の充実発展に寄与	新入生に対する講話	0	3,200	
			各種競技会支援	540,000	519,906	
			期生会発会等支援	200,000	267,200	
			学生の部隊実習支援	1,000,000	804,024	
			顕彰碑顕花式支援	150,000	352,630	
			開校祭支援	1,600,000	1,602,200	
			校友会対外活動支援	800,000	798,800	
			小 計	4,290,000	4,347,960	
		会員相互の親睦交流	機関誌の発行	4,130,000	2,978,669	
			会員の慶弔業務	1,000,000	418,375	
			各種競技大会による交流	150,000	190,295	
			地域支部等への助成	900,000	130,600	
			卒業留学生との交流	200,000	212,690	
			HVD 支援	300,000	306,060	
			HCD 支援	300,000	332,760	
			講演会・懇親会の実施	0	0	
		小 計	6,980,000	4,569,449		
		社会活動への寄与	安全保障講座支援	100,000	100,210	
			小 計	100,000	100,210	
		運営基盤の充実	代議員会の実施	0	0	
			期生会等のHP開設助成	100,000	20,105	
			同窓会名簿の維持	80,000	69,615	
			期生会名簿の作成支援	200,000	40,000	
			地域支部等の設立支援	200,000	0	
			会費納入の促進	370,000	335,740	
			期生会等との連絡網の整備	0	0	
			小 計	950,000	465,460	
		検討	法人化検討	0	0	
	小 計		0	0		
	維持管理	事務費	700,000	539,473		
		通信費	400,000	530,847		
		交通費	550,000	351,480		
		会議費	100,000	80,295		
		事務員雇用費	2,000,000	2,000,000		
		事務局室賃貸費	2,800,000	2,765,451		
		小原台事務局運営費	100,000	26,845		
		小 計	6,650,000	6,294,391		
		予備費	1,680,000	0		
		支出合計（一般会計）	20,650,000	15,777,470		
創立50周年記念事業	自体事業	記念講演	1,000,000	1,025,883	中止（23年度に返金）	
		記念祝賀会	2,500,000	206,387	中止	
		同窓会旗の制定	1,500,000	1,324,605		
		「小原台だより」特集号発刊	0	0		
		歴代校長の式辞集作成	0	21,390		
		同窓会業務史の整備	0	69,720		
		予備費	0	0		
	小 計	5,000,000	2,647,985			
	地域支部支援事業	1,000,000	1,160,710			
	小 計	1,000,000	1,160,710			
	母校支援	記念品の寄贈	0	0		
		「防衛の務め」復刻支援	0	3,870		
		小 計	0	3,870		
支出合計（50周年記念記念行事）	6,000,000	3,812,565				
支 出 総 計			26,650,000	19,590,035		
積立金に繰り入れ（取り崩し）			-6,000,000	3,334,445		
M C I 会計	収 入	前年度からの繰越し	21,945,582	22,273,703		
		預貯金利息	24,000	20,000		
		収 入 合 計	21,969,582	22,293,703		
	支 出	同窓生の著作等の寄贈	300,000	20,000	新規事業	
		謝金等	720,000	728,820		
		同窓会システムの維持経費	180,000	170,280		
		通信費及び事務費	150,000	22,380		
		交通費	200,000	182,400		
		予備費	20,419,582	0		
	支 出 合 計	21,969,582	1,123,880			
	次年度への繰越し			20,419,582	21,169,823	

会費納入状況

平成23年10月31日 現在

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計
1	339	320	94	11	6	2	19
2	359	347	97	8	2	2	12
3	484	452	93	17	12	3	32
4	465	437	94	20	7	1	28
5	529	483	91	26	11	9	46
6	477	433	91	36	5	3	44
7	503	460	91	29	7	7	43
8	467	421	90	33	8	5	46
9	498	447	90	35	6	10	51
10	498	456	92	25	8	9	42
11	495	448	91	28	8	11	47
12	466	417	89	29	8	12	49
13	468	421	90	30	8	9	47
14	491	459	93	18	2	12	32
15	463	449	97	9	3	2	14
16	428	405	95	9	4	10	23
17	498	454	91	20	10	14	44
18	423	397	94	9	7	10	26
19	446	413	93	14	17	2	33
20	383	352	92	17	3	11	31
21	489	468	96	12	3	6	21
22	474	416	88	28	9	21	58
23	408	386	95	8	8	6	22
24	446	414	93	8	17	7	32
25	422	400	95	10	4	8	22
26	506	467	92	26	7	6	39
27	388	377	97	8	1	2	11
28	451	421	93	17	8	5	30
29	391	358	91	16	7	10	33
30	410	346	84	47	11	6	64
31	431	409	95	15	6	1	22
32	404	354	88	31	13	6	50
33	447	376	84	44	19	8	71
34	426	373	88	38	9	6	53
35	496	479	97	9	5	3	17
36	354	345	97	6	2	1	9
37	384	347	90	16	7	14	37
38	337	264	78	59	10	4	73
39	356	328	92	8	11	9	28
40	388	329	85	33	21	5	59
41	405	365	90	23	14	3	40
42	407	366	90	19	12	10	41
43	431	385	89	23	15	8	46
44	381	221	58	117	39	4	160
45	351	157	45	131	20	42	193
46	360	235	65	68	7	50	125
47	388	338	87	32	11	7	50
48	425	378	89	23	12	12	47
49	325	294	90	26	4	1	31
50	369	320	87	27	13	9	49
51	411	371	90	16	13	11	40
52	415	344	83	15	23	31	69
53	431	383	89	21	21	5	47
54	364	330	91	15	8	11	34
55	397	368	93	14	10	5	29

会員数の項：会費納入対象者(留学生を除く防大卒業者数)

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 直海 康寛

昨年同様、本年も55期生の陸・海・空幹部候補生学校在校者のほぼ全員に完納していただきました。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のため、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果をあげております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「会員相互の親睦並びに母校の発展及び社会的活動への寄与」という会の目的を達成するため、同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から幹部候補生学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

同窓会活動の趣旨を理解いただき、会費未納の方(事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。)におかれましては、会費を納入して頂きたいとお願い申し上げます。

【納入先】 ゆうちょ銀行

口座番号 00260 - 5 - □□24826 (百万及び十万の桁は無記入)

加入者名 防衛大学校同窓会

通 信 欄 期別、要員別及び部隊名(現役の場合)を記入

【納入先】 三井住友銀行 飯田橋支店

口座番号 1270680

加入者名 防衛大学校同窓会 代表 國澤 輝生

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

【連絡先】

同窓会本部事務局：〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

Tel/Fax : 03-3351-8910

eメール : honbu@bodaidsk.com

【参 考】

普通会費

・防大本科卒業生

卒業時の3尉俸給月額(1号俸)の1/4(千円未満切捨)

・防大研究科卒業生(一般大学卒業者)(19年度改正)

卒業年度の3尉俸給月額(1号俸)の1/8(千円未満切捨)

延滞金 1,000円×(完納年度-3尉任官年度又は研究科卒業年度)
(防衛大学校同窓会会費に関する細則より)

会費算出例：45期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納年度 23年度、3尉任官年度 13年度(14.3)

23年度納入額 60,000円+1,000円×(23-13)=70,000円

(詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい)

機関誌「小原台だより」投稿のお願い

平成23年度機関誌「小原台だより」は、ご投稿頂きました方々のお蔭で編集することが出来、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ご承知のように、「小原台だより」は、同窓会会員の皆様方からの投稿記事によって成り立っており、また、現役自衛官や退職自衛官等の様々な分野でご活躍の様子が、同窓会会員各位の啓発に役立っております。

「小原台だより」を益々充実発展させるためには、皆様方からの積極的な記事の投稿が望まれますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

平成24年度機関誌「小原台だより」の投稿要領は、次のとおりです。

投稿通知期間：**平成24年 1月～ 6月**

メール(jmk@bodaidsk.com)、又は、電話(03-3351-8910)で

投稿締め切り：**平成24年10月15日(月)**

投 稿 文 書：A4縦使用・横書きで、文字サイズ12Pとし、2,000文字（挿入写真の分を含む）を基準とし、投稿者の顔写真を添付

投 稿 方 法：主としてメール(jmk@bodaidsk.com)、CD又は文書・写真の郵送も可

機 関 誌 担 当：同窓会本部事務局総務部 堀 弘(21期・陸上)

同窓会名簿管理に関するお知らせ

I 名簿の維持管理

会員名簿は各種同窓会活動の基盤となるものであり、同窓会事務局としましては出来るだけ最新のデータの確保と厳正な維持管理に努めております。データの確保については、主として以下の要領で実施しておりますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

1 各期生会からの通知

個人情報保護法制定等を受け関係各所からのデータ収集が難しくなったことから、名簿の修正は、平成16年度から各期生会代議員に、平成19年度からは各期生会業務幹事に対して、例年8月の定期異動後をお願いしております。

平成21年度からは電子メールの活用を図り、期生会との連携の強化を図りつつデータの収集に努めさせて頂いております。

業務多忙にも拘らず担当して頂いた皆様、ご協力有難うございました。

2 会員個人からの通知

同窓会ホームページ上の「異動連絡」の項は、削除致しました。今後は同窓会事務局へ電子メールまたは電話等での連絡をお願いします。

II 利用目的及びプライバシーポリシー

1 利用目的

次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供します。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台だより」の発送
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会、校友会、教務班等各種活動への協力
- (5) 地域支部等への協力

2 プライバシーポリシー

以下のプライバシーポリシーに従い個人情報の適切な保護に努めております。

- (1) 利用目的の範囲内で収集、管理します。
- (2) 会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はしません。
- (3) 会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、速やかに対応します。(同窓会事務局人事部担当にご連絡下さい。)
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩の無いように適切に管理します。

期生会会長・代議員名簿

平成23年7月1日現在

期	期生会会長				代議員						業務幹事			
	氏 名		要員	陸：氏 名	海：氏 名	空：氏 名	氏 名			氏 名	要員			
1	小西	生	海	宮本	田中	松山	藤高	井岩	勝利	利彦	海			
2	新井	雄	陸	高藤	石塚	河村	高新	岩谷	利哲	次勝	空			
3	力武	光	空	齊原	手嶺	出川	新中	村野	哲勝	勝藏	陸			
4	庄野	夫	陸	西川	長横	小近	浅二	見松	勇藏	宣英	陸			
5	松島	佐	空	辻見	大木	道大	若荒	木橋	重紀	夫誠	空			
6	増宮	和	陸	八坂	関高	荒鈴	吉坂	東保	勝文	昭敏	陸			
7	宮吉	明	海	横山	梶津	安大	荒吉	田木	勝一	敏夫	海			
8	磯仲	秀	海	嶋野	坂村	荒鈴	吉坂	井藤	泰秀	夫典	空			
9	石福	夫	海	小島	竹東	安大	荒吉	川見	誠一	弘喜	陸			
10	牧石	亨	海	嶋野	藤村	鈴安	吉坂	永藤	由喜	夫博	陸			
11	福牧	近	陸	洞澤	小田	花大	坂阿	枝永	政昇	三男	空			
12	渡本	旦	陸	関小	斎藤	稲江	藤鈴	村見	宗智	聡美	陸			
13	林直	人	陸	小佐	小豆	江鈴	有佐	永枝	剛安	男治	陸			
14	折木	一	空	石廣	小豆	浅鈴	石浅	村崎	修誠	功一	陸			
15	永杉	雄	海	岩瀨	赤長	長尾	持石	上谷	正和	顯茂	陸			
16	杉酒	彦	陸	酒西	宮加	岩崎	榊西	内戸	俊茂	人夫	陸			
17	佐藤	治	空	市小	曾山	山福	武大	藤小	克卓	己紀	空			
18	野田	広	陸	武飯	山福	若高	伊小	浦藤	三好	人郎	空			
19	宮岩	朋	陸	飯小	原德	吉佐	伊小	崎野	和武	正志	空			
20	櫻木	雄	陸	小田	柴副	外木	小田	村野	兼太	郎剛	空			
21	高屋	茂	陸	小田	副島	々保	時山	野原	太郎	克幸	空			
22	小田	人	陸	中山	中布	目塚	吉植	谷達	兼太	克樹	空			
23	馬堀	彦	陸	吉池	今施	長島	冲小	美崎	和主	秀明	空			
24	前田	晴	空	山根	元殿	竹有	笠原	川美	直秀	郎幸	空			
25	中塚	陽	空	大谷	西上	柴冲	笠原	田川	秀太	裕幸	空			
26	佐藤	知	空	迫谷	崎口	小笠	熊足	石谷	裕一	史宇	陸			
27	稻月	好	空	達川	崎田	吉寺	宇山	山口	剛幸	克樹	空			
28	足美	之	空	小森	田野	宇霜	湯下	切田	秀太	裕幸	空			
29	宇井	郎	空	湯小	濱平	佐霜	兵堤	田部	直秀	裕幸	陸			
30	石湯	徹	陸	武澤	川堤	中大	湯兵	切部	秀太	裕幸	陸			
31	清堤	幸	海	小武	中戸	山岩	堤武	司藤	太裕	祐剛	海			
32	武鎌	淳	陸	青庄	阿岡	原坂	岩阿	近清	木上	田益	陸			
33	高橋	典	空	石清	岡田	寺中	庄石	桐納	谷田	塚田	海			
34	青山	史	陸	桐納	田谷	齋山	清桐	益鬼	谷田	塚田	陸			
35	原田	岳	海	成	塚田	阿森	成				空			
36	吉水	一	陸								空			
37	和田	史	陸								陸			
38	山井	也	空								陸			
39	吉鬼	勇	陸								空			
40	成田	優	陸								陸			
41	濱金	卓	空								空			
42	金若	人	空								陸			
43		豪	空								空			
44			陸								陸			
45			陸								空			
46			空								陸			
47			陸								空			
48			陸								陸			
49			空								空			
50			陸								陸			
51			陸								空			
52			空								陸			
53			空								空			
54			陸								陸			
55			陸								空			

同窓会本部・支部等の役員紹介

平成23年10月11日現在

平成23年度同窓会本部役員

会 長	斎藤 隆 14 (海)	総務部長補佐	佐藤 秀樹 20 (陸)	経 理 部	藤枝 茂樹 21 (陸)
副会長兼理事長	林 直人 15 (陸)	総 務 部	鎌田 正広 21 (陸)	MCI 部長	松山 栄幸 19 (海)
副 会 長	荒川 堯一 16 (海)	総務部新規事業	戸田 友敬 20 (空)	MCI部長補佐	福田 裕 20 (陸)
副 会 長	永岩 俊道 15 (空)	総務部特命	湯元 正義 21 (海)	M C I	畔柳 敏郎 21 (空)
副 会 長	折木 良一 16 (陸)	総務部HP・機関誌	吉原 方人 20 (空)	MCI技術指導	村田 和美 17 (陸)
理 事	奥山 繁樹 14 (陸)	総務部HP・機関誌	堀 弘 21 (陸)	事務局HP技術担当	荒木 紀夫 8 (空)
理事兼事務局長	直海 康寛 16 (陸)	人 事 部 長	丸野 礼治 19 (空)	小原台事務局長	武藤 茂樹 28 (空)
理 事	新野 修 16 (空)	人事部長補佐	今井 恵治 20 (陸)	小原台事務局長補佐	坂口 大作 28 (陸)
理 事	加藤 保 17 (海)	人 事 部	宮崎 行隆 20 (海)	小原台事務局長補佐	與儀 孝 34 (空)
理 事	太田 牧哉 26 (陸)	人 事 部	冬木 義雄 21 (空)	小原台渉外部長	枇杷 利政 27 (陸)
理 事	江口 直也 26 (陸)	事 業 部 長	畠野 一郎 19 (陸)	小原台総務部長	保泉 哲也 26 (海)
理 事	槻木 新二 24 (海)	事業部長補佐	山形 克己 20 (陸)	小原台事業部長	福富 俊幸 29 (空)
理 事	森本 哲生 25 (空)	事業部 HCD/HVD	山形 克己 20 (陸)	小原台総務係長	加藤 清博 40 (陸)
会 計 監 事	瓦谷 育夫 15 (陸)	事業部 HCD/HVD	日笠玲治郎 21 (陸)	小原台総務係	邑山 雅人 48※ (海)
会 計 監 事	岩城 誠 15 (海)	事業部 囲碁・留学生	内藤 正 20 (空)	小原台広報係長	小林 郁扶 38 (陸)
会 計 監 事	松永 茂 17 (空)	事業部 囲碁・留学生	溝口 秀盛 21 (陸)	小原台広報係	和知 亮 48 (空)
会 計 監 事	屋根 正義 17 (陸)	事業部 テニス・助成	上田 達朗 20 (海)	小原台企画係長	塩入 和行 43 (陸)
50周年顧問	東郷 行紀 18 (海)	事業部 テニス・助成	金子 吉宏 21 (海)	小原台企画係	岩倉 達也 51 (陸)
50周年統括部長	竹口 健二 19 (海)	事業部 ゴルフ・講演	榊 喜隆 20 (陸)	小原台事業係長	津國 孝広 42 (陸)
50 周 年	風間 敏榮 19 (陸)	事業部 ゴルフ・講演	市川 当 21 (陸)	小原台事業係	松瀬 実 47 (空)
50 周 年	岩城 征昭 20 (陸)	経 理 部 長	國澤 輝生 19 (陸)		
総 務 部 長	塚田 章 19 (陸)	経理部長補佐	畑田 実 20 (海)		

平成23年11月15日現在

地域支部等役員

北海道地域支部	支部長 穴口 一男 9 陸	広島地区支部	支部長 加藤 紀夫 15 海	佐賀地区支部	支部長 光吉 達幸 10 空
	事務局長 前田貞一郎 30 陸		事務局長 森 千昭 16 陸		業務幹事 田中 豊博 12 陸
東北地域支部	支部長 吉川 洋利 14 陸	山口地区支部	支部長 永重 照彦 8 空	長崎地区支部	支部長 新野 克洋 9 海
	業務幹事 原田 富雄 17 陸		事務局長 高橋 佳嗣 11 陸		業務幹事 樋口八洲太郎 10 海
栃木地区支部	支部長 大内 伸浩 10 陸	四国地域支部	支部長 青木 初年 9 空	熊本地区支部	支部長 斉藤 四郎 9 陸
	理事兼事務局長 正岡富士夫 15 空		事務局長 松浦 孝昇 7 陸	大分地区支部	支部長 柳瀬 特志 7 陸
群馬地区支部	支部長 石橋 輝治 5 陸	徳島地区支部	支部長 青木 初年 9 空	宮崎地区支部	支部長 此本 皓男 10 陸
	事務局長 小島 健二 14 空		事務局長 清水 祥人 12 陸		事務局長 二宮 成一 14 陸
北陸地区支部	支部長 濱谷 隆平 6 陸	香川地区支部	支部長 戸松 久忠 6 陸	鹿児島地区支部	支部長 平田 辰雄 10 海
	事務局長 西川 清 15 陸	高知地区支部	支部長 岡林 靖之 8 海		事務局長 村山 文彦 14 陸
東海地区支部	支部長 佐藤裕紀夫 12 空		事務局長 川田 公一 16 空	沖縄地域支部	支部長 山縣 正明 14 陸
	事務局長 木原 文雄 12 陸	愛媛地区支部	支部長 赤岡 順 4 陸		事務局長 天野 道夫 37 陸
関西地域支部	支部長 田川 睦夫 12 陸		事務局長 瀬川紘一郎 10 海	小原台クラブ	支部長 岩崎 俊雄 9 陸
	事務局長 新見 泰朗 17 陸	九州地域支部	支部長 竹下 治雄 9 陸		事務局長 山田 耕平 40 空
岡山地区支部	支部長 高橋 正憲 6 空		事務局長 徳永 喜憲 14 陸	桜 華 会	会長(支部長) 塚口 千枝 40 陸
	業務幹事 永岑 富彦 10 陸	福岡地区支部	支部長 竹下 治雄 9 陸		事務局長 吉田ゆかり 40 空

会 員 の 計 報

平成22年11月1日から平成23年12月10日までに届いた会員の計報を紹介します。なお、詳細は防衛大学校同総会ホームページでご覧下さい。

1期生

(空) 福田 光信 平成22年 11月17日
(海) 南任 靖雄 平成23年 1月16日
(陸) 佐々木 直 “ 4月19日
(空) 山中 龍雄 “ 6月20日
(陸) 小野 勇 “ 9月5日
(陸) 楠本 惇之 “ 10月12日

2期生

(陸) 浅田 重義 平成22年 12月13日
(空) 木内 三生 平成23年 4月11日
(陸) 神馬 寛 “ 5月21日
(海) 深瀬 陽 “ 5月25日
(陸) 貴島 猛 “ 6月16日

3期生

(海) 登川 修治 平成23年 3月25日
(海) 室井 壽夫 “ 6月4日
(陸) 寺山 賢 “ 9月28日

4期生

(陸) 坂本 正晴 平成23年 2月6日
(陸) 杉原 剛介 “ 2月11日
(陸) 石川 一成 “ 5月22日
(陸) 弘中 一寿 “ 5月28日
(陸) 野々山富夫 “ 7月5日
(陸) 鈴木 宏是 “ 7月9日
(海) 岡田 政典 “ 8月24日

5期生

(陸) 緒方 宏 平成22年 11月23日
(空) 豊原 大治 “ 12月7日
(陸) 金田 一郎 平成23年 7月15日
(陸) 原 公平 “ 10月12日
(陸) 小山 兼松 “ 10月13日

6期生

(海) 大供 守 平成23年 3月18日
(陸) 鈴木 照康 “ 4月25日
(陸) 清水 健一 “ 7月1日
(空) 小笹 和男 “ 10月24日

7期生

(海) 岡本 康行 平成22年 11月20日
(陸) 浅野亮太郎 平成23年 1月3日
(空) 古賀 郁弘 “ 3月20日
(陸) 清原 美宏 “ 8月8日
(陸) 阪田 恭平 “ 9月30日
(陸) 外木 弘之 “ 12月7日

8期生

(海) 井上 公 平成22年 12月24日
(空) 相原 義夫 平成23年 3月17日
(陸) 篠塚 昭夫 “ 5月24日

9期生

(海) 萩原 隆 平成23年 8月20日

12期生

(陸) 高野 俊行 平成23年 1月2日
(陸) 吉田 史朗 “ 9月27日

13期生

(空) 津曲 義光 平成23年 11月27日

14期生

(陸) 松下 泰雄 平成23年 4月25日
(陸) 藤沢 弘彰 平成23年 4月28日
(海) 横田 幸生 “ 10月1日

15期生

(海) 武智 公司 平成23年 10月4日
(陸) 檜垣 司 “ 10月10日

19期生

(陸) 石井 雅久 平成23年 1月5日

21期生

(陸) 大平 卓功 平成23年 2月3日

25期生

(陸) 石川 哲也 平成23年 4月23日

26期生

(陸) 大橋 秋則 平成23年 10月19日

28期生

(空) 井上 浩之 平成23年 6月14日

40期生

(陸) 洗 岳史 平成23年 2月14日

43期生

(陸) 宇田川貴充 平成23年 2月14日

47期生

(陸) 井上晋太郎 平成23年 3月1日

前18号(平成23年1月1日)で紹介できなかった方々

8期生

(空) 村岡 邦昭 平成22年 2月5日

14期生

(陸) 鶴谷 好寛 平成22年 8月9日

編集：吉原 方人 (20期・空)、堀 弘 (21期・陸)

印刷：(株)エイコープリント



上段 第12期生のホームカミングデー (HCD)
下段 第35期生のホームビジットデー (HVD)

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
TEL・FAX 03-3351-8910
E/M: honbu@bodaidsk.com